

西ジャワ・プリアガン地方のスンダ人農村社会における 早婚・多産の文化・社会的背景

五十嵐忠孝*

Cultural Practices Favoring Young Marriage and High Fertility : The Case of a Priangan Sundanese Village, West Java

Tadataka IGARASHI*

This report aims to establish the social-cultural contexts of fertility behavior common to ethnic Sundanese, who predominate in the Priangan Highlands, West Java, and have long been well-known for their very young marital age and high fertility, in the hope that an understanding of fertility-related social perceptions and cultural practices of a particular ethnic group will provide a basis for explaining regional and ethnic differences in levels and patterns of fertility in Indonesia. Here I will simply describe a number of institutions and practices involving the early stage of the reproductive period in women, *i. e.*, from the attainment of adulthood to the consummation of the first marriage, which I observed during fieldwork in a Priangan Sundanese village. To compare social-cultural contexts of fertility, I also present a brief review of data on the fertility behavior of other Indonesian ethnic groups, particularly of ethnic Javanese, of which rather reliable data is available. Fertility-related practices in Sundanese society are distinct

from those in Javanese society in many ways. For example: 1. A considerable proportion of rural Sundanese girls get married before menarche, indicating that marriageability for rural Sundanese girls predates menarche, even though rural Sundanese residents state that menarche signals the attainment of marriageable age. 2. Most marriages, including those of premenarcheal girls, take place at the girl's own wish, and are not arranged by parents or relatives. Almost all women interviewed showed a strong dislike for arranged marriage including "child marriage." 3. A younger sister is strictly forbidden to marry before an elder sister. This practice naturally leads to the virtual universality of marriage at an early age. 4. Consummation of marriage, even "premenarcheal marriage," takes place at a very early stage. This means that divorce without consummation has rarely occurred, even though many first marriages have ended in divorce.

I はじめに

西部ジャワがジャワ島の中では相対的に早

* 京都大学東南アジア研究センター：The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

婚かつ多産地域であることはかなり以前から気付かれていたことらしい。今世紀の前半(1920年および1930年)にインドネシア(当時、蘭領東インド)で行われたセンサス結果は、ジャワ島の人口学的特徴として、初婚年齢が大変若く、皆婚への志向が強いこと、こ

の傾向は特に西部ジャワで著しく、反対に王候領(ヨクヤカルタとスラカルタ)、マディウン、クディリなど中央・東部ジャワの南部では比較的弱いことなど、ジャワ島の出生力が西に高く東に低いことを十分に予想させる結果を示している [Nederlandsch-Indië 1936: 49-51]。

このようなジャワ島における出生力の地域間格差、あるいは民族間格差に関する調査・研究は今日まで少なくないが、¹⁾本格的な分析は1971年のセンサスに基づく Lee-Jay Cho (趙利濟) らによる報告書が最初であろう。それによると、西部ジャワ州の女子初婚年齢はジャワ島全体のそれより1歳ほど低く、ヨクヤカルタ特別区のそれは反対に3歳ほど高いこと、ジャワ島の出生力は西から東へ漸次低下し、合計特殊出生率の差が約1 (すなわち生みあげた女子1人につき約1人、ただし農村部のみの比較) であること、再生産年齢

初期の出生力 (とりわけ15-19歳におけるそれ) が西部ジャワ州で著しく高く、ヨクヤカルタ特別区では低いこと、など今世紀前半に行われたセンサスが予想させる結果とよく符合する(表1) [Cho *et al.* 1980: 59]。

Lee-Jay Cho らはさらに県 (kabupatén) ごとに推計された合計特殊出生率の分析を行い、ジャワ島の高出生力地帯は、西部ジャワ州全域に及ぶのではなく、プリアガン地方に局在していることを見出した後 [ibid.: 61-62], 県別に計算されたコール (Coale) のインデックスを四つのカテゴリーに分類し、各県がどのカテゴリーに含まれるかの地理的分布を示している。これによると、きわめて興味深いことに、プリアガン地方とヨクヤカルタ地方の諸県はそれぞれまとまった地域を形成する。すなわち、プリアガン地方一帯には有配偶出生力の指標 (I_p) と有配偶割合の指標 (I_m) のいずれもが高水準であるカテゴリーに含まれる諸県が分布し、ヨクヤカルタ特別区を含む中部ジャワの南部一帯には、有配偶出生力については同程度に高いが有配偶割合が低いカテゴリーに含まれる諸県が分布する [ibid.: 64-65]。

ジャワ島の二つの文化的核心域、すな

わちスダ人の居住地であるプリアガン地方とジャワ人の文化的中心地であるヨクヤカルタとその近傍が、以上のように出生力構造の点でそれぞれあるまとまりを示す事実は、出生力構造が個別の文化・社会的な背景と強く関わっていることを強く示唆する。Lee-Jay Cho らはまた、有配偶割合の高い地域がプリアガン地方ばかりではなく、中・東部ジャ

表1 1971年センサスに基づく年齢別特殊出生率と合計特殊出生率の推定値 (ただし農村部のみ)

州/地域区分	年齢グループ (歳)							合計特殊出生率
	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	
西部ジャワ州	239	300	274	202	118	48	14	5.9
中央ジャワ州	178	281	265	203	122	48	13	5.5
ヨクヤカルタ特別区	116	268	263	214	132	54	14	5.2
東部ジャワ州	170	247	229	170	102	47	15	4.8
ジャワ-マドゥラ	193	273	254	191	114	48	14	5.4
インドネシア	187	282	270	208	128	58	18	5.7

資料の出所: Cho *et al.* [1976: 5]

1) これらの調査は、そのいずれもが中・東部ジャワ (ジャワ人) に比較した場合の西ジャワ (スダ人) の早婚・多産傾向を指摘する (例えば、Budi [1980: 40-41], Iskandar [1970: 114, 137], McNicoll *et al.* [1983: 53-55], Parsudi *et al.* [1980: 26], Timmer [1961: 35-38], Zuidberg [1975: 34-35] など)。また、ジャカルタに居住するスダ人系およびジャワ人系の子孫についても、同様な傾向が観察されている [Julfita *et al.* 1980: 47-48, 60-61]。

ワ島の北海岸一帯（パシール）にかけて分布することを示しており [ibid.: 71-72], ジャワ島における出生行動の背景として宗教（イスラム教）が疑いもなく重要な要素であることを窺わせる。²⁾

ジャワ島における出生力構造の地域・民族間格差とその文化・社会的背景に関するミクロなレベルでの調査・研究は、今日まで多少の蓄積があるとはいえ、そのほとんどがヨクヤカルタとその近傍で行われてきたもので [McNicoll *et al.* 1983: 56], ジャワ島におけるもう一つの文化的中心地であるプリアガン地方における同種の情報はほとんど欠落している。³⁾

このような資料的欠落を補い、出生行動の地域・民族間格差についてのより精緻な考察への端緒を見出すことを目的に、筆者はプリアガン地方の一村落において、出生行動とその文化・社会的背景について調査を続けてきた。ジャワ人とスンダ人はジャワ島内の近隣集団で多くの文化的要素を共有するとはいえ、ジャワ人について一般に指摘される出生

行動の諸特徴は、必ずしもスンダ人については当てはまらない。たとえば、すでに予備的な報告 [Igarashi 1985b: 86; 1987: 19] で指摘したように、ジャワ人社会において妊娠間隔を決める最も特徴的な要因として従来 V. J. Hull [1980: 231], Singarimbun *et al.* [1976: 175] 等々が指摘してきた産後の性的禁欲は、スンダ人社会においては、ジャワ人に較べ遙かに短く、分娩後の月経再開後もなお性的禁欲を続ける者は極めて稀であって、したがって産後の性的禁欲の習慣はスンダ婦人の妊娠間隔に直接関わりを持たない。スンダ婦人の出生間隔に直接影響を及ぼすのは産後の無月経期間であり、より突っ込んだ出生力研究のためには、産後の無月経期間と係わる授乳行動などの文化・社会的背景、および母体の栄養状態などの生物・医学的背景の検討が必要になろう。

本稿の目的は、このような出生行動とその文化・社会的背景の地域・民族間格差を明らかにする一環として、プリアガン地方の一村落の事例を通して、出生力のレベルとパターンに関連すると思われるスンダ人社会における習慣・慣行を研究ノートのひと渡り概観しておくことである。ただし、本稿では、女子再生産年齢の全期間を扱うのではなく、観察を再生産年齢初期（具体的にはスンダ人女子の性的成熟が始まる年頃から最初の婚姻後の性的結合成立まで）に限り、この期間の高出生力に関連付けられると思われる習慣・慣行を、主に、信頼できる資料が比較的揃っているジャワ人社会のそれと比較しつつ記述することにしたい。⁴⁾

- 2) スンダ人はイスラム信仰の厚い民族といわれる [Peacock 1973: 100-101]。この点では非イスラム的要素のより強いジャワ人とは対象的であるが、ただしジャワ島の北海岸一帯（パシール）に居住するジャワ人はイスラム信仰が厚いといわれる [Koentjaraningrat 1985: 21]。
- 3) プリアガン地域においてもミクロなレベルでの出生行動の調査は、例えば、 Dessy [1980], Djuariah [1968; 1981], Ketty [1979], Molly [1971], Siti [1980], Susi [1980], Winati [1970] などによって行われてきたが、これらのうち Djuariah [ibid.], Winati [ibid.] などを除くと、調査手法などの点から十分信頼に値すると思われるものはない。なお、西ジャワで行われた地域医療に関するインターディシプリナリーな調査として有名なスルボン・プロジェクトもまた出生行動に関する多くの情報を収集しているが [Zuidberg 1975; Zuidberg *et al.* 1977], 調査地がスンダ、マレー、ジャワ、中国系が混住する比較的ジャカルタに近いマレー語圏であるため、プリアガン地方のスンダ人社会における出生行動を理解する際の直接的な参考とは出来ない恨みがある。

- 4) 筆者の調査地であるサラムンカル村落は、西ジャワ州の州都バンドン市の東南東にある小巴マジャラヤから東南へ徒歩で約1時間40分のところに所在する山麓村で、バンドン県パセー郡に属する。サラムンカル村落の人口・世帯数、気象条件、生業等々についてはすでに別稿 [五十嵐 1982; 1984; 1987; Igarashi 1985a] に報告したので、ここでは繰り返さない。

II balég をめぐって

コーランは婚姻の下限年齢を定めていないといわれるが、イスラム社会ではコーランの記述に基づき、ある子供が結婚可能となるのは *bāligh* (インドネシア語では *balig*) と呼ばれる成長段階に達した時であると考えられている [Hammūdah 1977: 76; Mahmou'ddin 1982: 49; Maulana 1977: 414-415]。この *bāligh* はコーランの第4章第6節に言及されている言葉で、身体的な性的成熟を遂げる思春期を、社会的には成人としての社会的義務の生じる年頃と見做される成長段階を意味する言葉であるという [Allamah 1984: 57-62; Gibb *et al.* 1960: 993; Hughes 1885: 35]。イスラム法において何歳をもって *bāligh* に達したとするのかに関して、様々な見解があるらしいが [Gibb *et al.* 1960: 993]、身体的な性成熟を示す生理的現象、すなわち女の子は初潮をもって、また男の子は最初の夢精をもって“成人”になったと見做す慣行はイスラム諸国で広く見られる [Indonesia 1978: 36; Tanzil-Ur-Rahman 1978: 63; Winati 1970: 23]。

さて、上記の *bāligh* はスダ語では *balég* と訛るが、プリアガン地方一般におけるこの言葉の理解は、筆者の知る限り、上記の説明とはやや異なるので以下に述べておきたい。言うまでもなく村人は、ある一定の年齢をもってある成長段階に達したと判断するのではない。仮に、何歳以上を「成人」と見做すというような決まりがあったとしても、正確な暦年齢を知らない村人にとって、それは何の意味も持たないであろう [Soepomo 1933: 31]。村人が、*balég* に達したと判断する決め手とするのは、立居振舞・身のこなし方といった子供の示す行動様式である。すなわち、村人の説明に従えば、ある子供が *mangkat*

balég (“*balég* の段階に達した”) と判断されるのは、宗教的な戒律(1日5回の礼拝、断食月における断食など)を守ることが出来るようになること、不必要に泣かなくなること、他人との会話で状況に応じて丁寧言葉の使い分け (*undak-usuk basa*)⁵⁾ が出来るようになること、子守、水汲みなどの仕事を始め、女の子であるならば、食事の支度、食器洗い、脱穀・粃摺り、掃除などの家事労働を、男の子であるならば、薪集めなどの家事労働のほか、稗刈り、家禽・家畜の世話など生産活動に結び付く仕事を任せることが出来るようになる頃とされる。

村人が *balég* と判断する成長段階は、実際には何歳ごろからに相当するのだろうか? 試みに、いく人かの子供を対象に、すでに *balég* に達しているかどうかという質問をその母親に行なってみたところ、50%の子供が *balég* と見做されるようになる年齢(中央値)の推定値は、女の子の場合9.1歳、男の子の場合はこれよりわずかに遅く9.7歳であった。⁶⁾ この年頃では女の子も男の子も何等の二次性徴が発現していない段階であるから、子供が *mangkat balég* (“*balég* の段階に達した”) と判断する手掛かりを外見的に明らかになる性的成熟と関連させていないことが分かる。⁷⁾

- 5) 話し相手が話し手よりも目上か目下であるかによって丁寧さの度合を変化させる習慣(待遇法)のことで、ジャワ語の *unggah-ungguhing basa* に相当する。
- 6) これらは *status quo* データの *probit* 変換値から求めた中央値の最尤推定値である。この *status quo* 法については別稿で述べた [Igarashi 1985b; 1987]。なお、以下の表4、表6、表8なども同様の方法による。
- 7) ジャワ島住民の二次性徴の発現年齢に関する情報を筆者はまったく知らないが、平均初潮年齢は、先進国に較べ、かなり遅いので [Igarashi 1985b; 1987]、二次性徴の発現年齢もやはり遅いと想像される。なお、二次性徴としてふつう最初に認められる乳房蕾期(乳房発育の第2期)を迎える平均年齢は、先進国では、満10歳ないし11歳である [Tanner 1962: 36-37]。

balég に達した子供の重要な仕事のひとつは幼い弟・妹の子守である。母親が家を留守にすることの多い農繁期を通して、弟・妹の面倒を見る子供は学校を休まなければならない。サラムンカルの子供が通う小学校には“農繁期休み”の制度がないため、再び学校に戻っても授業についてゆけず、農繁期を通じて長期欠席することがしばしば中途退学のきっかけとなる。⁸⁾

本稿でとりあげる調査地サラムンカル村落在住の112名の既婚婦人の最終学歴は表2のようになる。学校へまったく通わなかった13

表2 サラムンカル村落在住112名の既婚婦人の最終学歴

最終学歴	人数
学校へ全く通わず	13
小学校1学年まで	8
小学校2学年まで	24
小学校3学年まで ¹⁾	22
小学校4学年まで	13
小学校5学年まで	17
小学校6学年まで	5
小学校卒業	8
中学校2学年まで	1
高等学校1学年まで	1
合計	112

注1) 3年制であった村落学校(sakola désa)を卒業した者も小数含む。

8) この地方で農繁期に学校を休みにすることは実際上不可能であると思われる。というのは、別稿[五十嵐 1984: 44-49]でも述べたように、水田耕作は降雨の季節的多寡と関係なく行われているため、農繁期は毎年異なった時期にやって来るうえ、同じ学区の中でも水田耕作の周期は集落毎に少しずつ異なり、したがって農繁期もずれてやって来るからである。ヨクヤカルタ特別区の天水依存地帯である二つの県においては学校の農繁期休みがあり、灌漑水が年間にわたって獲られる他の二つの県においてはそのような制度が取られていないという[White 1976: 292]。

名を除く通学体験者99名についてみると、その約60%が小学校2学年から4学年までの間で、あるいはその約85%が小学校1年から5年までの間で中途退学している。ここで注意しておくべきことは、応答者のすべてが、退学した時にはもうとっくに balég に達していた、と述べていることである。すなわち、たとえ小学校1年で退学した者でも、退学時の実際の年齢は7～8歳ではなく、かなりの仕事がこなせる年頃になっていたであろうと思われる。母親が子供の年齢を正確に知らないこともあって、入学時の実際の年齢には相当な幅があり、そのうえ各学年で落第する者が少なくないため(約18%)、各学年に在籍する学童の年齢幅は大変広く、たとえ1年生であってもすでに balég に達している者が幾人かは存在する。⁹⁾ 112名の既婚婦人について退学時の年齢を知ることが出来ないため、憶測になるが、おそらく、退学時の実際の年齢は、退学時の学年とはほとんど関係なく、balég に達して間もない頃から一人前に近い仕事がこなせるような年頃—11～13歳—までに集中していると想像される。

学校を止めた後の子供の身边にはいくつかの変化が生じるが、そのいずれもが「成人」となるための過渡的過程において重要な意味を持つと思われる。その一つは宗教教育に係わる。小学校に入る頃から子供達は、ngaos(または ngaji)、すなわち、近くに住む guru(イスラム教師)の元へ通い、コーランの読み方を習い始める。子供達はイスラム教師からコーランの読み方を習うだけでなく、コーランの教えに基づいた mapatahan(訓戒)を

9) サラムンカルの子供が通う二つの小学校の在籍学童の場合、たとえば、2学年に在籍する者の年齢は7歳から11歳まで、3学年のそれは8歳から14歳までにひろがる。また、例えば、満9歳の学童が在籍する学年は1学年から4学年まで、満10歳の学童が在籍する学年もまた1学年から4学年までにわたる[五十嵐 1982: 133]。

受ける。この ngaos は、毎夕 magrib (日没時の祈りをする頃、午後6時頃) から isa (就寝前の祈りをする頃、午後7時頃) までの時間帯に行われ、学校を出る頃には“修了”するのが慣わしである。ngaos を“修了”すると、イスラム教師に替わって、親が mapatahan をする番である。親による mapatahan がイスラム教師のそれと違うのは、その内容がしばしば“成人向け”である点で、ふつう男の子には男親が、女の子には女親が行う。村人がしばしば言うように「結婚することはコーランの教えに従うことであって、イスラム教徒としての務めである」というような結婚観、あるいは性に係わる数々の禁忌、妻や夫としての義務等々に関する教えが、村人なら誰でも諳じているコーランの一節やスダ語の格言・諺を混じえて親から子へと伝えられる。幼い弟・妹がイスラム教師のもとへ行って不在である日没後のひとときこそが、このような性に係わる教えを、間もなく性に目覚める年頃の子供に対して諭す格好の機会となる。

学校を止めて以降のもう一つの重要な変化は、仕事の内容が成人のそれに近づくことである。すなわち、balég の初期の段階では学校に通いながら家事の手伝いをし、いくつかの雑用を任されるだけであるが、学校を止めるとともに、女の子であれば本格的に家事の切盛りを始め、やがてすぐ下の妹・弟に子守を譲ることが出来るようになると、農作業へも参加するようになる。男の子の場合は農作業だけではなく村の共同作業へも加わるようになる。初めのうちは、賃金労働や刈取り作業に参加しても一人前の報酬は受けられず、せいぜい1回分の食事が与えられるだけである。女の子であれば、この頃から結婚する者が現れ始めるが、多くの者はしばらくの期間、現金収入の稼ぎ手として働き、その後最初期の結婚に至る。

表3-1 112名の既婚婦人が初婚以前に従事した主要な仕事

初婚以前に従事した仕事	人数
家事労働のみ (子守を含む)	28
村落及びその近傍 での賃金労働	39
町での賃金労働	41
学校 ¹⁾	4
合計	112

注1) これは、すべて在学中に最初の結婚を経験した婦人である。

その様子は表3-1に見ることが出来る。この表は112名の既婚婦人に対して初婚以前に従事した仕事のうち主要なものを一つだけ挙げてもらったものであるが、「村落及びその近傍での賃金労働」に従事した者と「町での賃金労働」に従事した者を合わせると、全体の約7割が初婚までに一度は現金収入の稼ぎ手として働いた経験を有することになる。

「村落及びその近傍での賃金労働」は、親元に留まりながら、報酬(賃金)を目的に他人が耕作する水田・畑地での農作業に雇われて農業労働に従事していた者である。これに対して「町での賃金労働」は、村から町(主にマジャラヤ)まで通うか、あるいは親元を離れて町(主にバンドン)で暮らしながら日雇い賃金労働に従事した者である。町で賃金労働に従事した41名のうち、34名がマジャラヤの紡績工場、6名がバンドンの市場、残り1名がバンドンの商店であった。言うまでもなく多くの者は、以上二つのカテゴリーのどちらか一つではなく、いずれにも従事していたものと思われる。

しばしば、ジャワ人の女は結婚後もよく働くが、スダ人の女は結婚したら働かない、と言われる [McDonald et al. 1974: 5]。これは行商など直接現金収入に結び付く活動について言われることであるが、スダ人と

ジャワ人のこのような違いは他の調査でも裏付けられている [Meyer 1981: 101-102]。サラムンカルにおいても、女が工場、市場などで働くのは、結婚までのほんの一時期に限られ、¹⁰⁾ その期間は平均1.5年ほどに過ぎない (平均値19.8カ月) (表3-2)。この

期間に多くの者は最初の配偶者となる者に出会い、結婚を待たずして賃金労働を辞めるからである。

balég のある段階で、乳房の発育、陰毛・脇毛の発生、喉頭隆起・声変わりなどの二次性徴が発現する。続いて身長が急激に伸びる時期があった後、女の子であるならば初潮を迎える。村人の説明によれば、“性的に成熟した、”あるいは“成人した”という意味で balég という言葉を使うことも決して間違いではないが、より正確には ahir balég, すなわち “balég 期の最終段階に達した” と言うべきであるという。¹¹⁾ すなわち、村人による

表3-2 初婚以前に町で従事した仕事の期間

期 間	人数
2.5 カ月	1
3 カ月	3
5 カ月	4
1 年	9
13 カ月	1
1.5 年	4
2 年	9
3 年	9
4 年	1
合 計	41

balég という言葉の使われ方は、標準的な辞書等による説明よりもずっと広く、性的成熟に至る以前のかんりの長い期間を含んでいることが分かる。

この ahir balég に達したと判断される決め手は、女の子であるならば月経 (héd または karēsban) が始まること、男の子であるならば最初の夢精 (ngimpi kaluar cai mani, ngimpi sapatēmon, あるいは単に ngimpi) を経験することであるとされる。¹²⁾ サラムンカルにおける平均初潮年齢は、別稿でやや詳しく報告したように、「思い出し法」により算出することは不可能である [Igarashi 1987: 2-3]。したがって、本稿でとりあげる112名の既婚婦人についての平均初潮年齢を知ることには出来ない。そこで、これとは別の集団、すなわち調査時点において10歳から19歳であった女子に対し、既潮か未潮かを尋ね、この結果から初潮年齢の中央値を算出した結果は表4のようになる。また同一の方法によりえられた年齢別夢精体験の有無と、初回夢精年齢の中央値も同表に見るようである。すなわち、50%の女子が初潮を迎える年齢は15.2歳、50%の男子が最初の夢精を経験する年齢は17.1歳と推定される。

ジャワ人社会におけるのと同様に [Geertz 1961: 119], スンダ人社会においても、女の子の初潮には祝い事を伴わない。せいぜい粥を作って内輪の者だけで食べるだけである。このことは、しかし、ある女の子が初潮を迎えたことに何の関心も払われないということではない。それどころか、誰々が初潮を迎え

10) ただし、まとまった現金が必要となるルバラン (Lēbaran — 断食明けの大祭) 直前などには主婦がにわか商人となって行商をする姿が見られる。また、離婚した婦人が現金収入活動に従事するのは当然と考えられている。

11) 筆者は当初、村人が盛んに用いる “ahir balég” という言葉は、“akil balég” の間違いであろうと考えていた。というのは、標準的なスンダ語辞典にはすべて “akil balég” は載っているが、“ahir balég” という言葉は見当たらないからである (ただし、最新のスンダ語辞典である Eringa [1984: 8] には ahir balég が載っており、「akil balég と同義」となっている)。この点を改めて村人に確認してみたが、村人の語彙には akil balég という言葉がないらしく、Hasan [1913: 52] が「スンダ語では akil balég とはいわず、ahir balég という」と述べている

ことに一致する。なお、スンダ人社会の習慣・慣行に関する従来の文献のうち、正しく “ahir balég” という言葉が記載されているのは、筆者の知る限り、Ajoie et al. [1927: 62] のみである。

12) Winati [1970: 23] は、プリアガン地方のある村の事例として、全く同様な村人の見解を報告している。

表4 初潮（女）および夢精（男）の年齢別体験割合、および初潮年齢中央値と初回夢精年齢中央値の probit 変換最尤推定値¹⁾

女			男		
調査時年齢	観察人数	初潮体験者(%)	調査時年齢	観察人数	夢精体験者(%)
10.0-11.9	9	0(0.0)	12.0-13.9	5	0(0.0)
12.0-13.9	7	0(0.0)	14.0-15.9	7	0(0.0)
14.0-15.9	14	8(57.1)	16.0-17.9	9	5(55.6)
16.0-17.9	19	16(84.2)	18.0-19.9	12	11(91.7)
18.0-19.3	14	14(100.0)	20.0-21.9	4	4(100.0)
全年齢	63	38	全年齢	37	20

初潮年齢中央値の probit 変換最尤推定値：
 中央値：15.2歳
 標準誤差：0.36
 標準偏差：1.51

初回夢精年齢中央値の probit 変換最尤推定値：
 中央値：17.1歳
 標準誤差：0.38
 標準偏差：1.20

注1) なお脚注6を参照のこと。

たというニュースはその日のうちに村中の若者が知るところとなるほどに、大きな関心を持って迎えられるのが常である。初潮を迎えたということは、その娘が結婚するのに“ふさわしい”年頃に達したことを意味するからである。

III 結婚適齢期

インドネシアで婚姻の下限年齢を定めた婚姻法 (Undang-Undang No. 1/1974) が成立したのは1974年12月、施行されたのは翌1975年10月からである。この婚姻法によれば、婚姻の下限年齢は男19歳、女16歳である [V. J. Hull 1975: 205; Susi 1980: 35]。しかしながら、法的な婚姻の下限年齢があるとはいっても、婚姻の手続きをする際に本人の暦年齢を確認する手段がないため、下限年齢以下の婚姻を防止することにはほとんど役にたっておらず、村社会においては、“ふさわしい”と考えられている年頃で多くの者が結婚する、という実態には何ら変化がない。

女の子の場合、多くの村人が強調するように、初潮を迎えたらなるべく早い時期に結婚

するのが良いとされる。このことは、前述した mapatahan (訓戒) の時に親が述べる文句からも窺うことが出来る。娘に向かって親が諭す文句は、例えば次のようであるという。

Manéh téh kakara balég
 buru-buru boga salaki
 améh aya nu mangmarabankeun,
 mangmakéankeun, mangngimahkeun.

“大人” (balég) になったからには
 一刻も早く夫を持ちなさい、
 夫を持てば、食べさせてくれて、
 服を買ってくれて、住む家もできるから。

この決まり文句の中で使われている balég は、すでに述べた ahir balég, すなわち初潮を迎える年頃（男子ならば、最初の夢精を経験する年頃）を意味する。

一方、男の子の場合は、ahir balég に達すると結婚可能な年頃になったと見做されても、必ずしも結婚に“ふさわしい年頃”とは考えられず、結婚相手を養ってゆけるだけの条件が整って初めてふさわしい年頃になる、と少なくとも村人の建前では考えられているらしい。男の子に向かって親が諭す時の文句

は、たとえば次のようである。

Manéh téh kakara balég
geura boga pamajikan
améh aya nu ngalaladéan.
Tapi méméh warég léléngohan
ulah waka boga pamajikan
lantaran kudu diparaban
jeung dipakéan.

“大人” (balég) になったからには
おまえも早く妻を持ちなさい、
妻は身の回りの世話をしてくれるから。
しかし枕添のいないことが辛くなるまでは
早まって妻を持ってはいけない、
妻を持ったら、食べさせて、
着るものも与えなければならぬぞ。

女の子は“性に目覚めたら”出来るだけ早く結婚しなければならないとする理由は、ほぼ二つに要約することが出来る。その一つは、初潮を迎えた女子はすでに十分に *napsu sahwat* (性的欲望) を持った成熟した成人であり、独身でいつづけることはふしだらを犯し、*adat* (慣習) を犯す危険な存在になりえる、という理由である。いま一つは、適齢期に達した後なおしばらくしても配偶者を持たない女の子は“売れ残り” (*teu payu*) と揶揄され、当人にとって大変恥ずかしいことであるだけでなく、その親も社会的な非難の対象にされる、という理由である。¹³⁾

13) 以上の様な理由づけは、Uton *et al.* [1977] (この本は、スンダの文人 (*bujangga*) 達による結婚に対する心構えとならわしについての書き残しを集成・編集し、一般大衆への示針として出版されたものらしい) にも、明瞭に述べられている。すなわち同書の「親の子に対する義務」と題する章には次の様に書かれている。「もし子供が“成人” (*akil baligh*) になったなら、女の子であれ男の子であれ、出来るだけ早く結婚させるよう努めるべきである…… (中略)……」

“年頃を過ぎた未婚の女子”を意味する *parawan jomblo* は蔑みのニュアンスを含む言葉であるが、不幸にして *parawan jomblo* と形容されるようになった娘を持つ親は、やむなく、適当な男を見つけて取り入り、婚資 (*émas kawin*)、婚姻登録料 (*ipékah*) 等々結婚に際して男側が負担すべき一切の義務を娘の親が支払ってまでして、自分の娘との結婚を懇願する、という。もちろん、当人にとっても親にとっても大変不名誉なこととされるこのような形式の配偶者探し (*meuli-meuli*) は、¹⁴⁾ サラムンカルにも先例があるといわれるが、実際に生じることはきわめて稀なことである。

女の子は“性に目覚めたら”出来るだけ早く結婚しなければならないという村人の指摘に関連して、いま一つ注意して置かなければならない習慣は、兄弟間における結婚の順序である。すなわち、同性の兄弟は、生まれた順に結婚するものとされ、未婚の姉(兄)よりも先に妹(弟)が結婚してはならないとする習慣である。この習慣はインドネシア全域において宗教の如何にかかわらず見られるというが [Boerenbeker 1931: 70-72; Maria *et al.* 1983: 167-169], この習慣が実際にどの程度の拘束力を持っているか、また男兄弟にも適用されるかどうかは地域によりかなりの差が

なぜなら、もし急ぎ結婚させないと、その子は性欲に耐えられず道を誤まり、その親は〔道を誤まった〕子供に由来する悪評と罪を負うことになるからである」 [*ibid.*: 3]。同様な理由付けは、やはりイスラム国で早婚傾向の極めて強いバングラデシュを始め [原 1968: 34; Maloney *et al.* 1981: 84], イスラム諸国に広く見られるという [Youssef 1978: 78]。

14) 女の側からは *meuli-meuli*, 男の側からは *dibeuli-beuli* と表現される。この言葉の適訳を思い付かないが、*meuli* は“買う,” *dibeuli* は“買われる”が本来の意味である。また、“漁網” (*sair*) という言葉に由来する *nyair* (“捕らえる”), *disair* (“捕らわる”) という言葉で表現されることもある。

あるらしい。ジャワ人社会 [Kasto 1982a: 69] やミナハサ人社会 [Inkiriwang 1983: 64] においては妹が姉に先んじて結婚することは実際には可能であるというが、スンダ人社会においてはこの習慣が厳格に守られているとしばしば指摘される [Hasan 1913: 53; Indonesia 1982: 49-50; McDonald *et al.* 1974: 4; Prawirasoganda 1941: 289; Prawirasuganda 1951: 241-242; Yasmine 1977: 20; Zuidberg *et al.* 1977: 80]。サラムンカルにおいても、この習慣は厳格に守られており、今日まで妹が姉に先んじて結婚した例は1件も生じたことがないという。妹に先を越されること (*karunghal*) は、姉にとって“死ぬほど辛い” (*paéheun*)、というのがその理由である。男兄弟についても、決して好ましいこととは考えられてはいないが、実際にはごく少数(最近では2件)存在する。

やむを得ぬ事情で妹(弟)が姉(兄)に先んじて結婚する場合には、一定の“罰金”を姉(兄)に支払うか、あるいは、妹(弟)の結婚に先立って姉(兄)が形式だけの結婚 (*kawin kias*, または *kawin panyélang*)¹⁵⁾ を挙げるか、いずれかの手続きを行えばよいとされるが、言うまでもなく本人にとっても親にとっても大変不名誉なこととされており、サラムンカルにおいては今日までそのような例が生じたことはないという。何人かの婦人は、筆者の質問に答えて、仮にそのような事態になったとしたら、同じく不名誉であっても、実質的な結婚である *meuli-meuli* の

方を選ぶだろう、と述べたが、同時にそのような事態にならないうちになぜ結婚しないのか、と意地悪な質問をした筆者に問い返す者もいたほどで、“ふさわしい”時期に結婚しないことへの社会的な非難の強さを窺うことが出来る。このように、結婚に“ふさわしい”とされる期間の上限は、女の場合はすぐ下に妹がいるかどうか、男の場合はすぐ下に弟がいるかどうかによるところが大きいらしく、この結果、“適齢期”の幅は、とりわけ女の子の場合、大変短くなる。同時に、この習慣が厳格に守られている結果として、生涯結婚しない者の生じる余地がほとんどなくなる。

一方、女の子の適齢期の下限についてはどのように考えられているのだろうか。ジャワ人社会においては、いわゆる「幼児婚」を別にすれば、女の子の初婚は初潮後の間もない時期に行われるのが習わしであるという見解が紹介されてきた(たとえば, Geertz [1961: 56, 119], Mayer [1897: 380-381], Tan [1973: 31] など)。これに対して, Singarimbun らは、ヨクヤカルタ特別区の一村落での調査に基づいて、初潮以前での結婚経験を有する婦人が少なくないことを見出し、従来の見解とは一致しないことを報告している [Singarimbun *et al.* 1974a: 70]。

サラムンカルにおいても、女の子の“年頃”は初潮を迎えた時点から、とする村人の見解があることは、前章で述べたとおりである。しかし、改めて、村人の考える“結婚にふさわしい年頃”の開始が初潮以降に限られるのか、あるいは初潮以前のある時期までを含むのかを尋ねてみると、村人の答えは整合的でない。というのは、少なからぬ村人が「初潮を迎えた女の子が、もしまだ未婚であるなら、それは大変恥ずかしいこと」という見解¹⁶⁾を

15) この *kawin kias* (または *kawin panyélang*) と呼ばれる結婚は、*Asal sakawineun baé, kajeun kawin isuk, pégat soré* (“なすべきことは結婚だけ、たとえ朝して、夕に別れても”) といわれるように、妹(弟)の結婚が可能となるように、姉(兄)がまったく形だけ挙げる結婚のことである [Prawirasoganda 1941: 289; Prawirasuganda 1951: 241-242; Yasmine 1977: 20]。ジャワ人社会にも同様な習慣があるかどうか筆者は知らない。

16) Dessy [1980: 61] もまた、ブリアガン地方のある村の事例として同じような村人の見解を紹介している。

述べるが、この見解は、初潮以前における結婚の可能性を含んだ表現であるにも拘らず、その一方でしばしば同一の村人が、女の子の結婚は初潮を迎えた後であるべき、とするからである。別稿 [Igarashi 1985b: 75-76] でも触れたように、「女の子の最初の結婚は初潮を迎えた後であるべきか、あるいはそれ以前でも構わないと考えるか」との質問を114名の既婚婦人に行なってみたところ、ほとんどの者(90.4%)が躊躇なく「初潮後」と答え、そのうちの幾人かは「初潮前の結婚は agama (イスラム教) が禁じている」と述べたほどである。筆者は、西ジャワ各地だけでなく、インドネシア各地で、初潮を迎えていない女子の結婚は agama (イスラム教) が禁じているという説明を幾度か耳に挟む機会があったが、もとよりイスラムでは未潮者の婚姻を禁じているわけではない。¹⁷⁾

サラムンカルの村役人によれば、初潮以前の女子は結婚することは出来ないという。サラムンカルにおいては、結婚を約束し合った二人の男女が結婚の意志を村 (kalurahan) の宗教係 (lêbé または amil) に伝える時 (jagrag あるいは pinton), および郡 (kacamatan) の宗教局 (kantor urusan agama) の宗教役人 (naib) の前で結婚の誓いをする時 (dirapalan) の都合2回、花嫁となるべき者がすでに初潮を迎えているかどうか問われる。この時、花嫁となるべき者が未潮であれば、その結婚は受け付けられない、とされる。したがって、村役人の側からすれば、初潮以前の結婚は無いはずということになる。しかし、問われた花嫁候補が既潮であると述べさえす

17) Zuidberg *et al.* [1977: 80] は、「イスラム法によれば、女子は初潮以前に結婚することを許されない」と述べているが、おそらくこれは村人の語ったところをそのまま書いたのであろう。いうまでもなくイスラム法は、一定の条件下で、未成人(女なら初潮以前)の結婚を認める [Tanzil-Ur-Rahman 1978: 184]。

ればよいのであるから、¹⁸⁾ 実際上はこの手続きが初潮以前の婚姻の防止に役立っているわけではない。初潮を迎えていない女子の結婚を、形式的とはいえ、除去するような手続きが取られている背景にどのような事情があるのか筆者には分からないが、¹⁹⁾ 少なくともこうした手続きの存在することが村人による結婚適齢期についての発言を縛っていると想像することは可能である。

以上、この章においては、村人の考える適齢期が初潮以前をも含むかどうかに関して二通りの見解があることを指摘するとどめ、次章以下で結婚の前段階である婚約、次いで初婚が実際にどのようなタイミングで生ずるのかに関する若干の数量データを提示しながら、再びこの点に触れてみたい。

IV 婚約のタイミング

前章では、結婚に“ふさわしい”年頃が初潮以後に限られるのか、あるいは初潮以前の

18) この時、未潮であるにも拘らず、既潮であるかのように答える者が実際には少なくないというが、他所でも同様らしい。Zuidberg らは、西ジャワ・スルボン郡でも同様な事実のあることを報告している [Zuidberg 1975: 9; Zuidberg *et al.* 1977: 80]。

19) この手続きは、婚姻の下限年齢を定めた婚姻法の施行(1975年10月)以降に始まったことではなく、“古くから”行われてきたことであると村役人は説明する。バンドン県 (afdeeling Bandoeng) においては、1921年の時点で、「すでに古くから、15歳以下の子供の結婚に際して親は特別の許可を願い出なければならないという習慣が広く行き渡っている。この願い出が認められなければ、結婚は許されない」と報告されている [Commissie voor het Adatrecht 1931: 88]。また、1947年には、宗教大臣によって幼児婚禁止の通達 (Instruksi Menteri Agama No. 4/1947) が出されている [Nani 1955: 59; Tanzil-Ur-Rahman 1978: 65]。今日、西ジャワで、婚姻の手続きに際して既潮・未潮を尋ねる習慣の背景には、あるいは、以上のような事情が関係しているのかも知れない。

時期をも含むのかという点になると、村人の反応は整合的ではないことを述べた。しかし女の子の適齢期が初潮と深く係わっていることは疑いようもなく、初婚の平均的なタイミングは初潮からほどない頃であることが予想できよう。この章では、実際にサラムンカルにおいて女子の初婚へ至るまでのプロセスの第一歩がどのようなタイミングで生じているのかについてまとめておきたい。

もとより、どのようなイブントをもって初婚に至るプロセスの第一歩と見做すかはにわかには決めがたいが、ここではとりあえず、村人の説明に従い、自他共に認める“相思相愛の仲”(bobogohan) になることとしておこう。ここで“bobogohan”の仲と認められるようになるのは、以下に述べるように、男側からのプロポーズを女側が受けた時点からと言う。サラムンカルにおけるプロポーズの手続きは簡単である。多くの場合、先ず男が娘を見染めると、panglayar (二人の間をとりもつ役を果たす人物) となってくれそうな者に近付く。panglayar となる者は、多くの場合、見染められた娘の男兄弟かごく近い親戚の者であるが、当該の娘をよく知る者ならば誰でもかまわないとされる。結婚の申し込みはこの panglayar を通して行われる。panglayar の伝える結婚の申し込みを娘が受け入れると、panglayar はその知らせを結婚の申し込み人に伝える。panglayar の伝える結婚の申し込みを娘が受け入れることを narima salam, すなわち“(自分を見染めた男からの)挨拶を受け取る”と言い、二人が婚約関係(bobogohan——本来の意味は“相思相愛の仲”)にあると公に知られるようになるのはこの時点からである。²⁰⁾

20) panglayar はまた娘の親へもこの知らせを伝えるが、娘の親はすでに二人の仲気付いているのが普通である。結婚が成立するかどうかは、この時点では、分からない。この後、男は遊び

ジャワ人社会においては配偶者を親が決めることが多いといわれる [V.J. Hull 1975: 205-214; Singarimbun *et al.* 1974a: 68-70]。例えば Kasto [1981: 43-44] によると、ヨクヤカルタ特別区の一農村では全初婚の77.7%が親(または親戚)によってアレンジされた結婚であったという。また、イスラム諸国においても同様であるという [Youssef 1978: 78]。これに対して、スンダ人社会はずっと自由で、配偶者の選択において親の意志が働く場面が少ないとよく言われる。²¹⁾

サラムンカルにおいても親による配偶者の選択 (diadu-adu) は過去において生じている。しかしその体験者は112名のうち6名(このうち5名は年輩の婦人、残りの1名は調査当時20歳程度の婦人)に過ぎない。これらを除くすべての婦人は、親を選んだ相手と結婚したのではなく、自分自身が相手に出会い、自らの意志で配偶者を決めたと答えている。

配偶者を誰が選択したかという質問を個々の婦人に尋ねた際に、実に多くの者が, diadu-adu mah alim teuing (“見合いをさせられるなんて、まっぴらごめんです”)と述べたほどに、親による配偶者の選択は好まれていない。この傾向は男についても同様である。親が決めた結婚をすることにこれほどまでの拒否反応があるのは、親によって配偶者を選択される結婚が、年端も行かないうちに結婚さ

と称して娘の親を3回まで訪ね、3回目の時、娘の男親が訪ねて来た男に自分の娘との結婚の意志を確認する。この時点から二人は公式にいなすけ同士となる。もし男が娘の親を訪ねて行かなければ、男のプロポーズは isēng (からかい) であったと見做されるが、この時点では正式の婚約関係が成立していないので何らの罰則も掛けられない。なお、以下このbobogohanを“婚約関係”と表現する。

21) しかしながら、Wong *et al.* [1985: 265] は、東南アジアの他の民族に較べた場合、スンダ人社会のみならずジャワ人社会をも、配偶者選択における自由のある社会としている。

せるいわゆる幼児婚の場合、あるいはその逆に、適齢期をとりに過ぎてしまって急ぎ結婚させなければならない場合など、多くの村人

表5 初めて婚約 (bobogohan) をした時、学校を出た後であったか、在学中であったか¹⁾

学校を出た後・ 在学中の別	婚姻の生じた年 ²⁾		合計
	1975年以前	1976年以降	
学校を出た後	45	34	79
在学中	9	4	13
{ 小学校1年	{ 1	{ 3	{ 4
{ 小学校2年	{ 3	{ 1	{ 4
{ 小学校3年	{ 3	{ 0	{ 3
{ 小学校6年	{ 1	{ 0	{ 1
{ 中学校1年	{ 1	{ 0	{ 1
不明 ³⁾	6	1	7
学校に通わず	13	0	13
合計	73	39	112

- 注1) 結婚に至ったかどうかを問わず、最初の婚約について尋ねた結果。
 2) 通学経験あるも、最初の婚約をした時に在学中であったか、学校を出た後であったか不明の婦人。
 3) 婚姻年の両群間で最初の婚約をした時に在学中であったか学校を出た後であったかの別に有意差なし。(カイ自乗検定: Yates の連続性の補正をした $\chi^2=0.279, df=1, p>0.05$).

が好ましくないと考えている結婚に限られるからであろう。

すでに見たように、多くの女子は小学校を中途退学した後、一人前の稼ぎ手として働き、その後のある時点で最初の結婚に至る。この過程のどの時点から結婚へのプロセスの第一歩が始まるのだろうか? 112名の既婚婦人のうち、99名の通学体験者について、最初の婚約を体験した時、まだ在学中であったか、あるいはすでに学校を出た後であったかを見ると(表5)、多くの者は学校を出た後に最初の婚約を体験したと述べている。「学校を出た後」とはいても、多くの者が小学校の中途退学者であることはすでに見た通りである。また、最初の婚約を経験した時すでに学校を出た後であったとする者の中には、在学中に非公式なプロポーズを受けるやすぐに学校を止め、その直後に婚約関係が認められたというケースもかなりあると思われる。この質問を行なった筆者に対して応答者のなかには、「bobogohan(婚約状態)となったのは学校を止めた後であるが、男側からの最初のアプローチがあった時は、まだ在学中であった」と述べた者、あるいは、「学校を出た後」と答

表6 婚約(bobogohan)の年齢別体験割合、および婚約年齢中央値の probit 変換最尤推定値¹⁾

女			男		
調査時年齢	観察人数	婚約体験者(%)	調査時年齢	観察人数	婚約体験者(%)
10.0-11.9	8	0(0.0)	16.0-17.9	10	2(20.0)
12.0-13.9	7	0(0.0)	18.0-19.9	14	9(64.3)
14.0-15.9	15	9(60.0)	20.0-21.9	4	3(75.0)
16.0-17.9	16	14(87.5)	22.0-23.9	8	6(75.0)
18.0-19.9	12	10(83.3)	24.0-25.9	15	13(86.7)
全年齢	58	33	全年齢	51	33

女子婚約年齢中央値の probit 変換最尤推定値: 中央値: 15.2歳
 標準誤差: 0.47
 標準偏差: 2.32
 男子婚約年齢中央値の probit 変換最尤推定値: 中央値: 18.9歳
 標準誤差: 1.10
 標準偏差: 4.99

- 注1) 結婚に至ったかどうかを問わず、婚約体験の有りなしを尋ねた結果。なお、脚注6を参照のこと。

えてから、「在学中にも幾度かプロポーズは受けたが、isēng(からかい)だった」というような注釈を加えた者が少なくなかった。おそらく、本気ともからかいともつかないプロポーズであるならば、かなりの女子が在学中に体験していると思われる。

最初の婚約をした時の年齢は、112名の婦人については、残念ながら不明であるが、調査時点で10歳から19歳までの女子、および16歳から25歳までの男子に婚約体験の有無を尋ねた結果は表6のようになる。すなわち、50%の女子が15.2歳までに、50%の男子が18.9歳までにそれぞれ最初の婚約を体験すると推定される。ここで興味深いことは、女子の最初の婚約時の平均年齢(ただし中央値)が初潮年齢と一致することである。もちろんこれだけの資料では各個人についてプロポーズが初潮以前になされたかどうかは判らない。が、男からの最初のアプローチを受けるのは、初潮というイベントと時間的に極く接近した時点から始まると見ることは出来る。ちなみに男子は“性に目覚めて”(最初の夢精体験)から結婚への最初のアプローチをするまでの経過時間は平均1.8年ということになる。

ある者はそのまま結婚に至るが、婚約はしばしば破棄されるので、実際に結婚に至るまでには数回にわたり婚約とその解消が繰り返されることになる。婚約が解消される理由は様々であるが、その一つは「(婚約期間が)長過ぎる」ことである。スンダ人社会においては、婚約期間が長いのはよくないことであると考えられており [Indonesia 1982:71], 何らかの事情で婚約期間が“長過ぎる”と、そのこと自体が婚約を解消する十分な理由となるらしい。

112名の既婚婦人について、婚約期間を(ただし、2回以上の婚約体験を有する婦人には、最初の結婚に至った婚約について) 尋ねた結果は、表7に見るように、半数の者が

narima salam から3カ月足らずで結婚しており(中央値は2.8カ月)、婚約期間が大変短いことが分かる。婚約期間が5~6カ月以上になると“長過ぎる”と考えられているらしく、この質問をする過程でも、自分の婚約期間を“長過ぎた”と述べた応答者は、婚約期間が5~6カ月以上の者にしばしば見受けられた。

婚約期間が“長過ぎた”理由としてもっともよく聞かれるのは、婚約相手(男)の兄、

表7 婚約(bobogohan)の期間¹⁾

期 間	婚姻の生じた年 ²⁾		合計
	1975年以前	1976年以降	
1 週 間	3	4	7
2 週 間	2	1	3
15 日	1		1
3 週 間	2		2
1 カ月弱	1		1
1 カ月	6	7	13
1.5 カ月	1		1
2 カ月	11	7	18
2.5 カ月	1		1
3 カ月	8	2	10
4 カ月	1		1
5 カ月	6	2	8
6 カ月	2	4	6
7 カ月	1		1
8 カ月		1	1
1 年	13	4	17
17 カ月		1	1
1.5 年	2	1	3
2 年	1	2	3
7 年		1	1
合 計	62	37	99
中央値(カ月)	2.9	2.4	2.8

注1) 最初の結婚に至った婚約について尋ねた結果。

2) 婚姻年の両群間で婚約の期間に有意差なし。(Mann-Whitney の U 検定: $U=1,124.5$, $E(U)=1,147$, $V(U)=18,820$, $z=-0.164$, $0.8650 < p < 0.8728$, ただし両側確率)。

表8 結婚の年齢別体験割合、および初婚年齢中央値の probit 変換最尤推定値²⁾

女			男		
調査時年齢	観察人数	既婚者(%)	調査時年齢	観察人数	既婚者(%)
12.0-13.9	4	0(0.0)	16.0-17.9	11	1(14.3)
14.0-15.9	11	3(27.3)	18.0-19.9	14	7(50.0)
16.0-17.9	11	9(81.8)	20.0-21.9	4	3(75.0)
18.0-19.9	16	14(87.5)	22.0-23.9	8	4(50.0)
20.0-21.9	14	11(78.6)	24.0-25.9	15	13(86.7)
22.0-23.9	13	12(92.3)	26.0-27.9	11	11(100.0)
全年齢	69	49	全年齢	63	39

女子初婚年齢中央値の probit 変換最尤推定値：

中央値：16.1歳

標準誤差：0.86

標準偏差：4.03

男子初婚年齢中央値の probit 変換最尤推定値：

中央値：20.4歳

標準誤差：0.75

標準偏差：3.91

注1) なお脚注6を参照のこと。

または応答者(女)の姉が未婚であったため、自分達の結婚を遅らざるをえなかった、という事情、あるいは反対に、婚約期間が大変短かったのは、応答者は妹、あるいは婚約相手の弟がすでに婚約していて、自分達の結婚を急がなければならない事情があったとする者が多い。以上いずれも、既述のように、未婚の姉(兄)に先んじて妹(弟)が結婚してはならないとされているからである。多くの者が初婚に至るまでに数回の婚約を経験しているのは、たとえ婚約が成立したとしても、一方は結婚を急がねばならず、他方は遅らせなければならないというように、双方の事情がしばしば一致しないことが、その主要な理由であるらしい。このように、婚約期間が短くだけでなく、初婚に至るまでに婚約とその破棄が繰り返されることが多いのは、女の子の“適齢期”と考えられている期間が短いことと裏表の関係にあると言えよう。

V 初婚のタイミング

112名の婦人のうち正確に初婚時の年齢が分かるのは約半数のみであるので、ここでは

平均初潮年齢(表4)や平均婚約年齢(表6)を求めたのと同じの方法で平均初婚年齢(ただし中央値)を求めてみると、女子は16.1歳、男子は20.4歳となる(表8)。²²⁾すなわち、女子の場合、初潮を迎えてから初婚までの期間、および最初の婚約を体験してから初婚までの期間はいずれも約1年となり、男子の場合は、最初の夢精経験から初婚までの期間は約3年、最初の婚約体験から初婚までは約1.5年ということになる。

前章で述べたように、女の子のある者は小学校在学中に、多くの者は学校を止めた後の間もない頃から“男のアプローチ”が始まり、初潮を迎える年頃までに半数の者が最初の“婚約”を体験し、女の子によっては何回かの“婚約”と破棄が繰り返された後、最初の結婚に至る。では、最初の結婚をした時点は、学校を退学(あるいは卒業)してから何年(何カ月)後になるのだろうか? 通学体験者99名の最終学歴を二つのグループ、すなわち、

22) ただし、調査当時在村しなかった(バンドンなどの町に居住)15名の女子を加えて計算すると、平均初婚年齢(ただし中央値)は17.3歳となる[Igarashi 1987: 8-9]。

表9 学校を中退・卒業してから婚姻（初婚）までの経過期間と最終学歴との関係
(括弧内は%)

最終学歴 ¹⁾	学校を中退・卒業してから初婚までの経過期間							合計	中央値 (年)
	1年未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年以上		
小学校5年以下	8(9.5) ²⁾	13(15.5)	8(9.5)	18(21.4)	7(8.3)	9(10.7)	21(25.0)	84(100.0)	3.22
小学校6年以上	8(53.3) ³⁾	0(0.0)	2(13.3)	0(0.0)	2(13.3)	0(0.0)	3(20.0)	15(100.0)	0.94
全最終学歴	16(16.2) ⁴⁾	13(13.1)	10(10.1)	18(18.2)	9(9.1)	9(9.1)	24(24.2)	99(100.0)	3.08

注1) 最終学歴の両群間で初婚までの経過期間に有意差あり。(Mann-Whitney の U 検定: $U=403.5$, $E(U)=630$, $V(U)=10,193$, $z=-2.2433$, $z'=-2.2684$, $0.0116 < p < 0.0119$, ただし片側確率)。

- 2) 小学校5年在学時に結婚した者1人を含む。
- 3) 小学校6年在学時に結婚した者2人, および高校1年在学時に結婚した者1人を含む。
- 4) 上記在学中に結婚した者合計4人を含む。

通学体験者99名の約85%が中途退学した小学校1年から5年までと、小学校6年以上とに二分して見ると(表9), 最終学歴が小学校5年以下であった者については, その半数が学校を出てから3年ほどの間に結婚している(中央値は3.2年)。一方, 最終学歴が小学校6年以上であった者は, その半数が1年足らずの間に結婚しており(中央値は0.94年), 学歴の長い女子は, 学校を出るや結婚を急ぐことが窺われる。すなわち, 小学校1年から5年までの間で中途退学した者と, 比較的高学年(とはいっても小学校6年以上であるが)まで勉強を続けた者とは, 初婚年齢に大した違いがないことが予想できるし, 女子の初婚が比較的短い年齢幅の中で集中的に生じていることが予想される。

すでに述べたように, 女子の場合, 少なくとも建前では, 初潮を迎えることが結婚適齢期に達したと見做される決め手となるにもかかわらず, 初潮以前での初婚体験を持つ婦人も少なくない。インドネシア各地における初婚時未潮率はすでに別稿 [Igarashi 1987: 11] で報告したが, 多少の改変を加えて再掲すると表10のようになる。いうまでもなく, 質問の性質上, 応答した婦人の中には, 初婚時に未潮であったにもかかわらず既潮であったと述べた者が, いかほどかは判らないが,

存在することを予想しなければならない。とはいえ, サラムンカル在住の既婚婦人131名については35.1%が, またその娘で既婚であった者51名(その多くは村外に住む)については37.3%が初潮を迎える以前に結婚したと答えており [Igarashi 1985b: 76-77], これまでに報告のあるインドネシア各地の初婚時未潮率としてはもっとも高率に属する。²³⁾ インドネシアの各地においても, サラムンカルほど高率ではないとはいえ, 初婚時に未潮であった者がかなりの割合で存在する。²⁴⁾

23) 初婚時の既潮・未潮の別を尋ねた際には, 結婚式(hajat pērtikahan)が行われた時点ではなく, 法的な婚姻手続き(dirapalan)が行われた時点で既潮であったか未潮であったかを尋ねた。結婚式は多くの場合, 法的な手続きと同日に行われるが, しかし時として数日から数週間遅れて行われることもあるからである。

24) 表10で引用したものの外, 初婚時未潮について次のような報告がある。Koesnoe [1975: 45-46] はマドゥラ人農村社会においても初潮以前に結婚する女子が少なくないと述べている。V. J. Hull [1975: 23] は, ヨクヤカルタ市近郊農村での調査に基づいて, 初潮以前の結婚は以前ほど一般的なものではなくなっているとしている。Winati [1970: 23] は, スンダ人農村社会においては“時々”(adakalanya)初潮以前に結婚する者がいると述べている。Zuidberg et al. [1977: 80] も初潮以前の結婚が“幾らか”あると報告している。これらの報告書は, しかし, いずれも初婚時未潮率の具体的な数字を挙げていない。

表10 インドネシア各地における初婚時未潮率
(初潮以前の初婚体験を有する既婚婦人の割合)

初婚時未潮率(%)	標本数	民族	場所
35.1	131	スンダ	西ジャワ州, 農村部 ¹⁾
37.3	51	"	" " " ²⁾
25.6	613	ブギス	南スラウェシ州, 農村部 ³⁾
23.0	?	ジャワ	ヨクヤカルタ特別区, 農村部 ⁴⁾
13.3	3,556	?	スラバヤ市, 都市部 ⁵⁾
8.0	571	ジャワ	ヨクヤカルタ特別区, 農村部 ⁶⁾
5.6	36	?	バタビア市, 都市部 ⁷⁾
3.3	610	バンジャール	南カリマンタン州, 農村部 ⁸⁾
約2	601	バリ	バリ州, 農村部 ⁹⁾
約2	563	オガン・イリール	南スマトラ州, 農村部 ¹⁰⁾
0.0	85	?	バタビア市, 都市部 ¹¹⁾
0.0	592	アチャー	アチャー特別区, 農村部 ¹²⁾

- 注1) 131名のサラムンカル在住既婚婦人。Igarashi [1985b: 77]
 2) 上記131名の既婚婦人の娘で既婚であった者51名。Igarashi [1985b: 77]
 3) Massuana *et al.* [1983: 82]
 4) Singarimbun *et al.* [1974a:70]
 5) スラバヤ市の1病院におけるカルテ分析。ただし初潮時年齢と初婚年齢が同じであった者を含む。Bruno [1980: 27]
 6) Kasto [1982a: 70; 1982b: 13]
 7) バタビア(現ジャカルタ)の1病院に来院した36名の初産婦で年齢の分かる者。スンダ, ジャワ, マレーの都市混合住民。Meuleman [1937: 2421]
 8) Mahfudz [1982: 63-64]
 9) Rimbawan [1982: 85]
 10) Syoib [1983: 64]
 11) 7)と同一の病院に来院した初産婦で年齢の分からない者。Meuleman [1937: 2423]
 12) 昔は, 初潮以前に結婚する者が, とりわけ貴族階級で, 多く見られた。Cut Arian [1982: 70, 84]

本稿で扱われた112名の既婚婦人について初婚時の既潮・未潮状況を示せば表11のようになる。すなわち, 婚姻(初婚)と来潮が同日であったと答えた者2名を含めると, 初婚時の未潮率は42.9%(45/105)となる。すでに述べたように, 婚姻の下限年齢を定めた婚姻法が1975年10月から施行されたので, 112名の既婚婦人を, 初婚の年が1975年以前であった者と1976年以降であった者との2群に分けて, 初婚時の未潮率を比較してみると, 1976年以降現在までの最近約10年間に結婚(初婚)した若い世代においてさえ, その初婚時未潮率(27.0%)は, これまでに報告のあるインドネシア各地の初婚時未潮率としてはもっとも高率に属すブギス人村落とジャワ人村落のそれを上回る(表10参照)。とはいえ, サラムンカルの初婚時未潮率は, この10年間に結婚(初婚)した若い世代において, 確かに減少していることが分かる(表11)。

ただし, 既述のように, 応答者のなかには初婚時に未潮であったにもかかわらず, 既潮であ

表11 婚姻年別にみた初婚時の既潮・未潮状況

婚姻の生じた年 ¹⁾	初婚時既潮(a)	初婚時未潮(b)	初婚と同日に来潮(c)	不明(d)	合計(a+b+c+d)	初婚時未潮率[b/(a+b+c)]
1975年以前	33(45.2)	33(45.2)	2(2.7)	5(6.8)	73(100.0)	48.5%
1976年以降	27(69.2)	10(25.6)	0(0.0)	2(5.1)	39(100.0)	27.0%
合計	60(53.6)	43(38.4)	2(1.8)	7(6.3)	112(100.0)	41.0%

- 注1) 婚姻年の両群間で初婚時の既潮・未潮の別に有意差あり。(カイ自乗検定:「初婚時既潮」と「初婚と同日に来潮」を併合した時の $\chi^2=4.58$, $df=1$, $p<0.05$).

表12 初潮から婚姻（初婚）までの経過期間の比較（％）

表12-1 初婚時に既潮であった婦人について

1年未満	1年	2年	3年	4年	5年以上	合計 (標本数)	平均値 (年)	中央値 (年)	民族	場所
70.7	17.2	8.6	1.7	0.0	1.7	100.0(58)	0.81	0.48	スンダ	西ジャワ州, 農村部 ¹⁾
45.9	14.1	12.9	3.5	2.4	21.2	100.0(85)	2.3	0.85	?	バタビア市, 都市部 ²⁾
23.9	19.2	16.8	10.2	7.1	22.9	100.0(590)	2.8?	1.9	バンジャール	南カリマンタン州, 農村部 ³⁾
9.0	17.0	24.0	16.0	10.0	24.0	100.0(500)	3.2?	2.5	アチュー	アチュー特別区, 農村部 ⁴⁾
…23.5…	…11.8…	…20.6…	…8.8…	…35.3…	…35.3…	100.0(34)	3.5?	3.2	?	バタビア市, 都市部 ⁵⁾
2.2	7.6	12.6	13.6	17.1	46.9	100.0(601)	4.5?	4.3	バリ	バリ州, 農村部 ⁶⁾
……………(データなし)……………						— (525)	4.4	—	ジャワ	ヨクヤカルタ特別区, 農村部 ⁷⁾
……………(データなし)……………						— (552)	2.1	—	オガン・イリール	南スマトラ州, 農村部 ⁸⁾

注1) 西ジャワ・サラムンカル村落における筆者の調査。

2) バタビア（現ジャカルタ）の1病院に来院した初産婦で年齢の分からない者。スンダ、ジャワ、マレーの混合都市住民。Meuleman [1937: 2421-2424]

3) Mahfudz [1982: 64]

4) Cut Arian [1982: 70]

5) 注2)と同一の病院に来院した初産婦で年齢の分かる者。Meuleman [1937: 2421-2424]

6) Rimbawan [1982: 85]

7) Kasto [1982a: 70; 1982b: 13]

8) Syoib [1983: 64]

ったと述べている者がいると予想される。筆者は、1986年に短期間サラムンカルを訪れた際に、1983年調査の対象となった131名の既婚婦人の大部分に対し、再度同じ質問を試みたところ、1983年調査時においては初婚時に既潮であったと答えたにもかかわらず、実は未潮であったと述べた婦人がかなり存在するのを見出した。どうやら、「初潮以前に結婚してはならない」という建前があるため、面と向かって尋ねられると、未潮であったにもかかわらず、既潮であったと答えてしまったらしい。そのような例は、比較的最近に結婚した若い婦人によく見られた。したがって、表11においても、最近になるほど、初婚時に未潮であったにもかかわらず、既潮であったと述べている例が多く含まれている可能性を考えておかなければならないだろう。

以下に、初婚時に既潮であった婦人

と、初婚時において未潮であった婦人とに分けて、初婚のタイミングを初潮との関係で今少し詳しく見てみよう。まず、初婚時に既潮であった婦人について、初潮から初婚までの経過年数を見ると、表12-1のようになる。サラムンカル村落の既婚婦人のうち、初婚時に既潮であった者58名については、その半数の者が初潮から半年以内に（中央値は0.48年）、70.7%の者が1年未満で（初潮から「1年後」を含めると、87.9%が1年以内に）最初の結婚を経験している。インドネシアの他の地域と較べると、初潮後1年以内に初婚を経験する者の割合はスンダ人社会においてもっとも多い。

初潮からの経過時間が1年以内において、初婚がどのような分布で生じるかについては、筆者によるものとバタビアにおけるもの以外に資料がないが、二つの資料は、初潮後3カ月から5カ月の頃にピークのあるかなり

表12-2 初潮から婚姻（初婚）までの期間が1年未満の婦人について（%）

1月未満	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計 (標本数)	民族	場所
4.7	4.7	7.0	27.9	9.3	14.0	16.3	4.7	2.3	4.7	4.7	0.0	100.0(43)	スンダ	西ジャワ ¹⁾
10.3	10.3	7.7	23.1	10.3	23.1	7.7	2.6	0.0	0.0	5.1	0.0	100.0(39)	?	バタビア ²⁾

注1) 西ジャワ・サラムンカル村落における筆者の調査。

2) バタビア（現ジャカルタ）の1病院に来院した初産婦で年齢の分からない者。スンダ、ジャワ、マレーの混合都市住民。Meuleman [1937: 2421-2424]。

表13 初潮から婚姻（初婚）の手続きをした日までに経験した月経回数
(ただし初婚時に既潮であった婦人のみ)

(括弧内は%)

婚姻の 生じた年 ¹⁾	初婚までの月経回数								合計	中央値 (回)
	1回	2回	3回	4回	5回	6回	10回	多数回		
1975年以前	2(6.1)	11(33.3)	12(36.4)	4(12.1)	2(6.1)	1(3.0)	1(3.0)	0(0.0)	33(100.0)	2.8
1976年以降	4(14.8)	7(25.9)	5(18.5)	4(14.8)	4(14.8)	1(3.7)	0(0.0)	2(7.4)	27(100.0)	3.0
合計	6(10.0)	18(30.0)	17(28.3)	8(13.3)	6(10.0)	2(3.3)	1(1.7)	2(3.3)	60(100.0)	2.9

注1) 婚姻年の両群間で初潮までの月経回数に有意差なし。(Mann-Whitney の U 検定: $U=414$, $E(U)=445.5$, $V(U)=4,285$, $z=-0.4812$, $0.6242 < p < 0.6312$, ただし両側確率)。

似た分布を示す(表12-2)。すなわち、初婚時に既潮であったと言っても、初婚のタイミングは初潮から数えて数回目の月経があった頃に集中していることが予想される。

このことを確認するために、「最初の結婚をしたのは初潮から数えて何回の月経があった後か?」という質問をしてみたところ、初潮から数えて3回目の月経が生じた時点までに約半数の者が(初潮から初婚までの月経回数の中央値は2.9回)、ほとんどの者(91.6%)は5回目の月経が生じた時点までに結婚している(表13)。このパターンは最近においても変わっていないらしく、1975年以前の婚姻と1976年以降の婚姻に分けて見ても、初潮から初婚までの月経回数にはたいした違いが見られない。すなわち、近年初潮以降に最初の結婚をする女子の割合が多くなってきている(表11)とはいえ、初潮後数回目の月経を迎えた頃に結婚するというパターンには変化が生じておらず、初潮からの月経回数が、なお、

村人の考える女子の“適齢期”の重要な決め手になっているらしい。このように考えると、女子の“適齢期”の幅が極めて狭いこと、また現にその狭い“適齢期”の間で女子の最初の結婚が集中的に生じていることの一部が理解できるのではないだろうか。

次に、初潮以前に結婚(初婚)したケースに関連して、注意しておかなければならない習慣は、いわゆる幼児婚である。²⁵⁾ この幼児婚に相当するスンダ語、*kawin gantung* は“吊り下げられた結婚、”すなわち、幼い頃に

25) 幼児婚はとりわけ西ジャワに多いと言われることもある[V. J. Hull 1975: 205]。しかし、今世紀初頭、ジャワ島とマドゥラ島で行われた生活水準調査(Mindere Welvaart-Onderzoek)では、ジャワ-マドゥラのほぼ全域からこの習慣が報告されており[Maria et al. 1983: 146-155]、また、1921年の時点で、プリアガン地方ではこの習慣は稀であるとする報告もあり[Commissie voor het Adatrecht 1931: 88]、必ずしも、スンダ人社会に特徴的な習慣と見ることは出来ない。

親によって決められていた結婚、というほどの意味であろう。しかし、今日、具体的にどのような結婚形態を指してこの言葉が使われるのか必ずしも明瞭ではなく、時として、初潮以前の結婚はすべて *kawin gantung* であるというような拡大解釈がされることもある。Soepomo [1933 : 63-64] によると幼児婚 (*kinder huwelijk*) は二つの形式に分かれ、第1の型は、花嫁・花婿のいずれもが「未成人」で、花嫁・花婿は婚姻後も「成人」するまでは各々の親元に留まる形式の婚姻である。いま一つの型は、花嫁は「未成人」であるが、花婿は「成人」であって、この場合、花婿は結婚とともに花嫁側の家に移り住むことになるが、花嫁が「成人」となるまでは性交渉が許されない、という形式の婚姻である。Soepomo はこの二つの形式のうち、前者のみを *kawin gantung* としている。²⁶⁾

サラムンカルにおいても *kawin gantung* という言葉の了解は村人により異なるらしい。ある村人は「*kawin gantung* は昔はあったが、近ごろは全くない」と語り、また別の村人は「昔はいうまでもなく、今日でさえ *kawin gantung* はいくらでもある」と語る。サラムンカルにおいて、本人によっても、また村人によっても *kawin gantung* の体験者と見做されている例は、ほぼ50歳以上の婦人に幾例か存在するが、これらは配偶者を親が選択したと述べた婦人の一部に相当する。親(または親戚)によってアレンジされた結婚であった点以外に、これら *kawin gantung* とされる例に共通しているのは、婚姻時の年齢が10歳前後であったとされること、婚姻か

ら初潮までの経過年数が1年から数年であったこと、婚姻後しばらくは夫と同食することを親に禁止されていたことなどであるが、婚姻時に夫が“未成人”であったケースは1例も存在しない。実際、サラムンカルにおいては、花嫁・花婿のいずれもが“未成人”である結婚はかつて生じたことがないというから、上記 Soepomo の分類に従えば、サラムンカルで実際に存在したのは第2の型のみであって、これを村人は *kawin gantung* と呼んでいることが分かる。

この外に、本人は *kawin gantung* の経験ありとするにもかかわらず、他の村人によっては必ずしも *kawin gantung* の経験者とは見做されていない婦人が全年齢層にわたって存在する。これらの婦人に共通しているのは、婚姻時には未潮であったが、婚姻から初潮までの経過時間はせいぜい1年であったこと、婚姻後すぐには性交渉を行わなかったことなどであるが、そのほとんどは親のアレンジした結婚ではなく、男側からのプロポーズを本人の意志 (*niat*) で受け入れた結婚である。このようなケースを *kawin gantung* と見做すかどうか村人の意見が一致しないのは、幼少時に本人(女の子)の意志と係わりなく親が決めてしまう結婚のみを *kawin gantung* とする考え方から、初潮以前の結婚をすべて *kawin gantung* と考えるものまで、この言葉の了解に相当な幅があるためであると思われる。

このように、初潮以前の結婚といえども、その多くは、男がプロポーズし、女が自分の意志でそれを受けたとしているので、村人の基準から言えば、その婦人は当時すでに結婚するのに“ふさわしい”だけの性的成熟を遂げ、また、配偶者選択に関する十分な判断が出来ると見做されるだけの年頃になっていたと考えられる。実際、初婚時に未潮であった婦人は、多くの場合、初婚のタイミングが初

26) 例えば、Djuariah [1981 : 110], McDonald *et al.* [1974 : 3], Mayer [1897 : 381] などによる *kawin gantung* の説明は、いずれも Soepomo の分類の第1の型に相当し、第2の型については何の説明もされていない。なお、Boerenbeker [1931 : 48] は第1・第2の両方を *kawin gantung* としている。

潮と近接している。婚姻(初婚)から初潮までの経過時間は表14-1に見るようで、初婚時に未潮であった者のうち50%の者は3カ月以内(中央値は2.6カ月)に、また、ほとんど(94.6%)の者は1年以内に初潮を迎えている。すなわち、初潮以前の結婚とは言っても、実際

には、二次性徴がすでに十分発現している“間近に初潮を控えた女の子”(boboloneun)に限られていることが分かる。

比較の資料としては Kasto [1982a; 1982b] によるジャワ人社会(ヨクヤカルタ特別区農村部)における不完全資料が唯一のものである(表14-2)。これによると、初婚から初潮までの経過年数が2~4年であった者が22%を占め、サラムンカルに較べはるかに多い。いずれの資料も標本数が限られているが、Kasto [ibid.] の資料は、年少の頃に本人(女の子)の意志と係わりなく親が決めてしまうような kawin gantung の出現率が、あるいはジャワ人社会ではなおかなり高率であることを示しているのかも知れない。

以上のように、いずれの意味で kawin gantung という言葉を使うにせよ、実際にサラムンカルで生じて来た初婚時未潮のケースのほとんどは、村人の基準から言えば、すでに結婚するのに“ふさわしい”ほどの性的成熟を遂げ、かつ自らの意志で結婚した、という点から言っても、そして次章で見られるように婚姻後の性的結合が多くの場合速やかに成立している点から言っても、幼少時に本人の意志と係わりなく親によって決められたという意味での kawin gantung ではない。むしろ、サラムンカルにおける初婚時未潮のケースは、人よりもやや早めに結婚したただけであって、初潮以後の結婚とひと続きのものであると考えておいた方がよいのではないだろう

表14-1 婚姻(初婚)の手続きをした日から初潮までの経過期間(ただし初婚時に未潮であった婦人のみ)

初潮までの経過期間	婚姻の生じた年 ¹⁾		合計
	1975年以前	1976年以降	
初婚と同日	2		2
2 日	1	1	2
1 週間	1	1	2
1 カ月	6	2	8
2 カ月	4	2	6
3 カ月	4		4
5 カ月	1	1	2
7 カ月		1	1
8 カ月	1		1
9 カ月	1		1
1 年	5	1	6
3 年	2		2
2回目の結婚後	3	1	4
初潮無しで妊娠	3		3
不明	1		1
合計	35	10	45
中央値(カ月)	2.9	2.0	2.6

注1) 婚姻年の両群間で初潮までの経過期間に有意差なし。(Mann-Whitney の U 検定: $U=105$, $E(U)=126$, $V(U)=782$, $z=-0.751$, $0.4472 < p < 0.4532$, ただし両側確率)。

表14-2 婚姻(初婚)の手続きをした日から初潮までの経過期間の比較(括弧内は%)

1年未満	1年	2年	3年	4年	5年以上	合計(標本数)	民族	場所
78.4	16.2	0.0	5.4	0.0	0.0	100.0(45)	スンダ	西ジャワ州, 農村部 ¹⁾
...	78.0...	22.0.....		0.0	100.0(46)	ジャワ	ヨクヤカルタ特別区, 農村部 ²⁾

注1) 西ジャワ・サラムンカル村落における筆者の調査。

2) Kasto [1982a: 70; 1982b: 13]

か。

VI 性的結合成立のタイミング

この最終章では、婚姻から第1子を受胎するまでの経過時間に影響を及ぼすと考えられる性的結合成立のタイミングについて述べるが、それに先だって、婚姻直後における家族計画の受容に関して若干触れておきたい。いうまでもなく、今日において、家族計画を実践するかどうかが生産力に与える影響は、甚大だからである。

サラムンカルの村人が近代的避妊法を始めたのは古いことではない。²⁷⁾ 1975年頃からごく一部の婦人がピルの服用を始めていたというが、保健所 (puskesmas) の指導で家族計画事業が強化されたのはわずか数年前のことである。この事業強化の当初は、しばしば強制的といっても過言でないような“指導”が行われたようで、家族計画普及員の意を受けた hansip (民防隊員) の高圧的な“指導”に泣き出す婦人を筆者自身いく度も見かける機会があったほどである。家族計画が広まって数年後の今日でも、当初ほど避妊法や副作用に対する婦人達の恐れは薄まってきたものの、村の婦人にとって家族計画は逃れることの出来ない“義務”といってもよいほどに相当徹底して行われている。この“義務”から免除されるのは、出産後ほぼ3カ月以内の者、結核等による虚弱あるいは高血圧症などの理由により避妊をしてはならないというおすみつきを保健所の医師からもらって来た者だけである。

ところが面白いことに、第1子をまだ持たない新婚夫婦もまたこのような“義務”の免

除者として扱われており、家族計画が村に入って以来今日まで、短期間であれ何らかの近代的方法で避妊を行なった新婚夫婦はいない。もちろん、第1子が流産であったり、あるいは生後間もなく死亡した場合も、家族計画を行わなければならないという勧告もされなければ、何らの圧力もかからない。また、すでにいく人かの子供を持つ再婚夫婦についても、再婚後の第1子が生まれるまでは同様である。

ジャワ人とスンダ人を対象に行われた「子供の価値」についての調査によると、応答者の民族、教育、年齢等々の属性にかかわらず、家族計画そのものには多くの者が賛意を表明している一方で、第1子の出生を遅延させるための家族計画の使用に対しては、賛意を表明した者がほとんどいなかったという [Darroch *et al.* 1981: 2, 47, 71]。Meyer [1981: 95] は、この理由を、第1子が生まれることによって当該夫婦が完全な「成人」として認知されるという慣行 [T. H. Hull 1975: 321] や、夫婦間の絆を子供を媒体にして強める習慣 [Geertz 1961: 136-137] (以上いずれもジャワ人社会について) などと関連付けているが、スンダ人社会においても同様な習慣・慣行が存在するといわれる [Djuariah 1981: 107; Hasan 1913: 9]。

サラムンカルにおいては、結婚相手を養っていけるだけの条件が整ってから結婚することなど、建前はともかく、実際には難しい。婚姻後の花嫁側の親との同居期間を終え若夫婦が新居に移った後もなお生活費は完全に親がかりであることが少なくなく、またこれを特に恥ずかしいこととも思っていないらしい。中には、新居に移った後も、食事時になると、妻は妻の親元へ、夫は夫の親元へ行って食事を摂っているケースすらあった。このような若夫婦に対して、非難めいたコメントをする村人はもちろんいるが、その一方で、

27) 西ジャワは、ジャワ島の中では、家族計画の普及がもっとも遅れた地域であった。その理由はイスラム指導者の家族計画に対する否定的態度にあったとされる [Kasto 1981: 67-68]。

寛容な意見を述べる村人も少なくない。彼らによれば、「結婚したばかりの者は sawawa (成人) とは名ばかりで、子供が出来るまでは本当の sawawa とは言いがたい」からである。²⁸⁾ 自ら生活の糧を得ることがまだ出来ないうちでも結婚することが早過ぎるとは考えられず、また、今だ自らの糧を得ることの出来ない若夫婦の“甘え”に対して村人が寛容であることは、一面では、napsu sawat (性欲) は性行為によってのみ満足させられるべきものであり、性行為は“合法的な結婚”(nikah anu sah) を通じてのみ許される、とする村人の性行為あるいは結婚に対する見方と矛盾しない。

しかし、最初の子供が出来ることにより、この寛容の度合はずっと変わる。子供が生まれることにより夫婦間が安定するとはよく言われることで、妻方(あるいは夫方)の親が、普通もっとも条件の悪い水田をこども夫婦に収益を二分する約束で小作させる (nĕngah) のはどんなに早くても第1子が生まれてからである。このように結婚して間もない若夫婦にとって第1子の生まれることが大きな意味を持つことを考えれば、結婚当初から家族計画をさせ、第1子の出生を遅らせることは、余りにも“非人道的”なこと、ということになる。このように、家族計画が普及した今日においても、第1子の出生までは、人為的な出生抑制の行われていないいわゆる自然出生力に近い状態にある。

ここで、自然出生力に「近い」と断わったのは、いうまでもなく、ジャワ人社会においては、婚姻の成立した時点から性的結合の成立 (consummation of marriage) までの経

過時間が長く、また、初婚における離婚率が高いため、性的結合が成立することなく離婚に終わる婚姻の多いことが知られているからである。すなわち、意図するとしないとにかかわらず婚姻当初の禁欲は第1子の受胎遅延という効果を有すると考えられるが、ジャワ人社会におけるこのような傾向は初婚年齢が若いほど、また、親によってアレンジされた結婚ほど顕著であることがいくつかの調査により確認されてきた。一方、スンダ人社会については、Zuidberg *et al.* [1977: 97] がジャカルタ市の近郊農村(スルポン郡)におけるほとんどの婚姻で性的結合が遅滞なく成立しているであろうと憶測していることを除けば、比較すべき確かな資料は皆無である。以下、サラムンカルにおいても、ジャワ人社会におけるのと同様な程度に婚姻後における性的結合の遅延が見られるかどうかについて述べてみたい。

スンダ人社会には、modana (あるいは numbas) と呼ばれる婚姻後の儀式がある。新郎は、普通、婚姻の儀式 (hajāt pĕrtikahan) が行われたその日から新婦側の家に移り住むが、新郎はある一定期間新婦と枕を共にせず、寝室の扉の前で寝なければならぬとされる。このような婚姻当初の puasa (性的禁欲) は、babari ngarah rĕjĕki、つまり「難なく幸運をつかむため」であるという。この禁欲期間は、しかし、長すぎてもいけないとされ、幾人かの村人は適当な期間を1週間(あるいはその限度をせいぜい2週間まで)とする。この禁欲期間が開けると、新郎側の提供する羊を屠殺して、その肉を近隣に配る。これが modana (あるいは numbas) と呼ばれる儀式で、その意図は、いうまでもなく、新郎・新婦が性的に結合したこと (geus hadĕan, geus salulut) を近隣に伝えることである。²⁹⁾

28) また、年端も行かないうちに子持ちとなった女(男)に対しては、sawawa leutik (「小さな成人」の意味) というような名称があるのも、子供が出来ることによって sawawa (“一人前”) と見做すという村人の考え方を示している。

29) Prawirasoeganda [1941: 287], Prawirasuganda ↗

新婦が身体を許さない限り、新郎側は羊を提供せず、したがっていつまでも *modana* の儀式は行われないことになる。これはもちろん好ましくないことと考えられており、そのような新婦には *randa béngsrat*³⁰⁾ という蔑みの言葉が投げかけられるだけでなく、新郎側からの離縁申し立ての理由となる。

婚姻当初における禁欲の習慣がどの程度守られているかについて、多くの村人の意見は、実際にはほとんど守られていないだろう、という点で一致する。112名の既婚婦人について、婚姻(初婚)から性的結合が成立した時までの経過日数は表15に見るようである。³¹⁾ 同表から分かるように、婚姻後6.9日までに50%の者が、1カ月までに92.1%の者が最初の性的交わりを行なっている。*Singarimbun et al.* [1974b: 20, 31] は、性的結合の成立が婚姻後2カ月以上であったものを性的結合の遅れた婚姻と見做した場合、性的結合が遅滞なく成立した婚姻は全体の67.6%にすぎないことを報告しているが、同じ基準をサラムンカルに適用すると、性的結合が遅滞なく成立した婚姻は全体の94.1%(95/101)となる。また、*V. J. Hull* [1975: 215] は、ヨクヤカルタ市近郊農村の事例で、性的結合が1カ月未

表15 婚姻(初婚)の手続きをした日から最初の性的結合が成立した日までの経過期間¹⁾

性的結合までの経過期間	初婚時における既潮・未潮の別 ²⁾		合計
	初婚時既潮 ³⁾	初婚時未潮	
0日(初夜)	20	7	27
1日		1	1
2日	2	2	4
3日	3	3	6
4日	2		2
1週間	12	13	25
10日	2		2
13日		1	1
2週間	2	1	3
19日	1		1
20日		1	1
3週間	2		2
28日		1	1
1カ月	9	8	17
40日	2		2
2カ月		2	2
3カ月	2		2
1年	1	1	2
合計	60	41	101
中央値(日)	6.8	7.1	6.9
平均値(日)	18.5	22.1	19.9

- 注1) 112名の既婚婦人の内、初婚以前に妊娠した者 (*leuir tikah* のケース) 1名、婚姻以前に同棲していた者 (*kumpul këbo* の経験者) 1名、経過期間不明の者9名を除く。
 2) 初婚時における既潮・未潮の両群間で性的結合までの経過期間に有意差なし。(Mann-Whitney の *U* 検定: $U=1078$, $E(U)=1,230$, $V(U)=20,088$, $z=-1.072$, $0.2802 < p < 0.2846$, ただし両側確率)。
 3) 婚姻(初婚)の手続きをした日と来潮が同日であった者2名を含む。

満に成立したものを性的結合が遅滞なく成立した婚姻とし、これに当たるのは全体の76.1%としている。この基準に従えば、サラムンカルにおいて、性的結合が遅滞なく成立した婚姻は75.2%(76/101)となり、*V. J. Hull*

∨[1951: 236-237]によれば、スンダ人社会における婚姻当初の禁欲期間は7日間で、7日目に *hajat balik paturon* (“寝布団を裏返す”) と呼ばれる儀式が行われてはじめて新郎・新婦は交わることを許されるというが、このような儀式はサラムンカルでは知られていない。

- 30) ただし、この言葉の本来の意味は、「夫と性的に交わることなく離縁された女」、あるいは「性的に交わることなく夫に先だたれた女」である。
 31) 表15は、結婚式 (*hajat përtikahan*) が行われた日からではなく、法的な婚姻手続き (*dirapalan*) が行われた日から最初の性的結合が成立した日までの経過日数を尋ねた結果である(脚注23を参照のこと)。なお、この表から、経過日数不明として除いた9名の婦人は、*atos disawér* (“式を挙げた後で”)、あるいは単に *atos nikah waé* (“結婚した後で”) というように、具体的な日数(月数)で答えなかった者である。

の報告するヨクヤカルタ市近郊農村の事例と同程度になるが、ただし、婚姻から性的結合までの経過時間の算術平均値は、ヨクヤカルタ市近郊農村では0.4年であるのに対し[V. J. Hull 1975: 201, 216], サラムンカルではわずか19.9日に過ぎない。

婚姻から性的結合成立までの経過日数が1週間以上であった婦人にたいしてはその理由を尋ねてみたが、多くの者は単に da isin (“恥ずかしかったから”), da sieun (“恐かったから”) などと述べたに留まる。そのほか、結婚式に参加した親戚・知人などの客がしばらく泊まり込んでいた、結婚式をまだ挙げていなかった、あるいは、結婚早々夫が町へ働きに出てしまった、未潮であった等々の理由を挙げた婦人が見られたが、婚姻当初における性的禁欲といった積極的な理由を挙げた婦人は1人もいなかった。

なお、表15から経過日数不明として除いた婦人9名を含めて、性的結合が成立することなく初婚が離婚に終わったケースはひとつもない。ジャワ人社会においては、性的結合なしで離婚に終わったケースは、例えば, Singarimbun *et al.* [1974b: 20] によれば全初婚の17%, Chapon [1976: 39] によれば全初婚の18.1%であったという。サラムンカルにおいて性的結合なしの離婚が大変稀な現象であることは、ジャワ人社会に較べればスンダ人社会では性的結合なしの離婚は少ないだろうとする McDonald *et al.* [1974: 6] の憶測を支持する。³²⁾

32) ここで、婚前交渉、および初婚以前の同棲について触れておきたい。“合法的な結婚”によらない“同棲”(kumpul kēbo——“水牛の交わり”)を意味するジャワ語)は建前として勿論許されないことであるが、実態としても、ジャワ人社会 [Singarimbun *et al.* 1974a: 77-78] に較べると、スンダ人社会でははるかに少ないらしい。サラムンカルにおいては、結婚以前の短期間、近くの町で同棲生活をしていたといわれる

さて、初婚時に花嫁が未潮であった婚姻については、性的結合成立の遅延が見られるだろうか。ジャワ人社会については、婚姻そのものは初潮以前に行われても、初潮を迎えるまでは性的交わりが許されないといわれる [Crawford 1820: 86]。Singarimbun *et al.* [1974b: 20] や V. J. Hull [1975: 215-216] は、性的結合の遅延した結婚の割合が、結婚時の年齢が若かった場合にとりわけ多く見られる³³⁾理由を、この習慣に関連付けている。

同様な習慣はスンダ人社会にも存在するといわれる [Winati 1970: 23]。しかしこの習慣は、サラムンカルだけでなく、スンダ人社会一般であまりよく守られていないらしい。

前章において筆者は、結婚を約束し合った一組の男女が結婚の意志を村の宗教係に伝える時、および郡の宗教局の宗教役人の前で結婚の誓いをする時の都合2回、花嫁となるべき者がすでに初潮を迎えているかどうかを問われ、この時、花嫁となるべき者が未潮であれば、その結婚は受け付けられない、と述べ

1組の若夫婦を除くと、かつてそのような例が生じたことはないという。ただし、婚約相手との婚前交渉は少数ながら存在する。婚約相手が妊娠したと分かると直ちに正式な婚姻関係を結ぶが、このような結婚は leuir tikah, すなわち“結婚するのが(妊娠よりも)遅かった”といわれ、この表現自体が示しているように、このようなケースに対する村人の態度は比較的寛容である。しかし一般に婚約期間が短いから、leuir tikah の例は大変少なく、本稿で扱った112名のうちに1人、この他に2名を数えるだけである。なお、表15では leuir tikah のケースと kumpul kēbo の体験者、各1名を除いて

33) Singarimbun *et al.* [1974b: 31] の報告によれば、初婚時年齢が15歳未満であった結婚と21歳以上であった結婚を比較すると、性的結合が遅延した結婚および性的結合なしで離婚に終わった結婚の占める割合は、15歳未満の結婚では73.4%であるのに対して、21歳以上の結婚では14.8%に過ぎない。

表16 婚姻（初婚）から初潮までの経過期間別に見た婚姻から性的結合までの経過期間
（ただし初婚時に未潮であった婦人のみ）¹⁾

婚姻（初婚） から初潮まで の経過期間 ²⁾	婚姻（初婚）から性的結合までの経過期間 ²⁾													合計
	0日 (初夜)	1日	2日	3日	1 週間	13日	2 週間	20日	28日	1 カ月	2 カ月	1年	不明	
2日														2
1週間														2
1カ月	1		1	1	2								1	8
2カ月	1			1	2			1	1					6
3カ月	2				1						1			4
5カ月	1								1					2
7カ月									1					1
8カ月					1									1
9カ月					1									1
1年	1				3					1				6
3年			1		1									2
2回目の結婚後 初潮無しで妊娠	1			1				1	1		1			4
不明		1												1
合計	7	1	2	3	13	1	1	1	1	8	2	1	2	43

注1) 網掛け部分は、来潮以降に性的結合が成立したケースを示す。

2) 初潮までの経過期間と性的結合までの経過期間との間に有意な相関なし。(Spearman の順位相関：結びの補正をした $r_s = -0.0380$, $t = -0.2153$, $df = 32$, $p > 0.8$, ただし両側確率)。

ておいた。ところが、実はこの時、花嫁となるべき者が初潮を迎えていなくとも、花婿となるべき者が、結婚後の性的交わりをしばらくの間（1カ月とか2カ月とか）控えると宣言すれば、その婚姻申請は受け入れられるという。したがって、村役人側の建前をより正確に言えば、婚姻は初潮以前であっても行うことは出来るが、性的結合は初潮以前に行なってはならない、ということになる。しかし、花婿となる者に宣言させるというような手続きが、初潮以前における性的交わりを予防する効果をまったく持っていないことは言うまでもない。実際、初婚から最初の性的結合までの経過日数が1週間以上であった婦人に対して遅延の理由を尋ねてみた際、少数ながら未潮であったことを挙げた婦人があるものの、改めて尋ねてみると性的交わりを控え

たのはほんの短期間で、初潮を迎える以前に性的結合が成立していたケースがほとんどである。

初潮以前における性的交わりを控えるべきかどうかに関する村人の平均的見解は以下のようなものである。すなわち、花嫁が初潮を迎えるまで性的交わりをしてはならないというのは、naib（宗教役人）の意見であって、自分達はそれを haram（イスラムに基づく禁忌）とも pamali（イスラムに基づかない伝統的禁忌）とも考えてない、という。また、未潮の花嫁を持った場合、結婚当初にどのくらいの期間、禁欲するかは花婿次第であるが、1週間とか1カ月とか枕を共にしないことはあっても、初潮を迎えるまで性的結合を控える者はいない、ともいう。

このような村人の見解は表16から確認する

ことが出来る。すなわち、婚姻（初婚）の時点で未潮であった43名の婦人のうち（表11参照）、来潮以降に最初の性的交わりを持った者は43名中わずか7名に過ぎず（しかも、このうち4名は初婚の時点から初潮までの経過期間がわずか1週間以内の者である）、サラムンカルにおいては初婚時に未潮であった婦人の多くは最初の性的交わりを初潮以前で体験していることが分かる。

表16はまた、婚姻（初婚）から初潮までの経過期間が長ければ、それにしたがって婚姻当初における性的禁欲期間も延長するというような傾向も示していない。さらに、初婚時に既潮であった婦人と未潮であった婦人に分けて見ても、最初の性的結合を行なった日までの経過日数に差が見られない（表15参照）。すなわち、婚姻時の既潮・未潮の違いは、婚姻後の性的結合成立のタイミングに何の影響も及ぼしていないといえる。

スンダ婦人について見られる以上の事実は、ヨクヤカルタ特別区の一農村で、初婚時未潮の婦人176名のうち初潮を待たずに性的交わりを行なった者はわずか7名に過ぎなかったという報告 [Singarimbun *et al.* 1974b : 20] と大変対照的で、初潮以前における性的交わりは許されないという習慣が、ジャワ人社会においてはよく守られていることが窺える一方、スンダ人社会ではまったく名目的なものでしかないことが分かる。

以上までに見たように、サラムンカルにおいては、ジャワ人社会についていわれるほどの性的結合遅延の傾向は見られない。ジャワ人社会においては、親によってアレンジされた結婚にこの傾向が顕著であるというが、サラムンカルにおいて性的結合の遅延傾向がほとんど見られない事実は、ほとんどの婚姻が本人の意志でより自由に行われていることと矛盾しない。

V. J. Hull [1975 : 216] をはじめ、Chapon

[1976 : 65], McNicoll *et al.* [1983 : 50] 等が、出生力観察において意味のある変数として採用しなければならないのは、初婚年齢ではなく、性的結合の成立した時点の年齢である、と主張しているのは、ジャワ人社会で性的結合遅延の傾向が強いからである。しかし、スンダ人社会においては、この傾向は大変弱いので、初婚年齢をもって性的結合が成立する時点と見做すことが可能と考えられる。むしろ、スンダ人社会においては初婚時未潮の婚姻が多く、初潮以前に性的結合が成立するのが普通であることを考えれば、スンダ婦人の出生力観察に意味のある変数となるのは初潮を迎えた時の年齢ではないだろうか。

Ⅶ 残された問題——むすびに代えて

再生産年齢初期における高出生力の社会・文化的背景について検討すべき点はなお多々あると思われるが、ここでは本文で言及出来なかったことを2点だけ付記することで結びに代えたい。

その第1点は離婚率である。言うまでもなく離婚率の高いことは出生力を下げる方向に作用する。西ジャワの離婚率が高いことは1930年のセンサス [Nederlandsch-Indië 1936 : 50] 以来今日まで変わらないが、スンダ人社会における離婚は、ジャワ人社会におけるそれと二つの点で異なることに注意しておいてよい。その一つは、本文でも述べたように、性的結合が成立することなく離婚に至るケースが、ジャワ人社会よりはるかに少ないことである。もう一つは、スンダ人社会における離婚後の再婚が、ジャワ人社会に比べ、より容易・高率に生じることである [Kasto 1981 : 41-42; Nederlandsch-Indië 1936 : 50]。スンダ婦人の再婚率が高いことに関しては、現金収入活動に従うことが少ないスンダ婦人

が離婚すると、生活の糧を確保するため、すぐまた結婚しなければならないからである [McDonald *et al.* 1974: 5] と説明されたり、あるいは、スンダ人社会において婦人の離婚回数が多いことは、その婦人が“魅力のある(女である)”ことを示す財産になるといった考え方が存在するからである [Tan *et al.* 1970: 32] というような説明がされることもある。以上のようなスンダ婦人の離婚に特徴的な二つの傾向、すなわち性的結合なしの離婚が稀であること、および再婚がより容易に行われることの2点によって、スンダ婦人の高い離婚率が出生力に与えるマイナスの効果は、ある程度相殺されると予想される。

第2点は性的禁欲である。婚姻直後における性的禁欲についてはすでに本文で述べた通りであるが、ここでは性的結合が成立して以降の日常的禁欲について触れておきたい。よく知られているように、ジャワ人社会には種々の性的禁欲日があるとされている。このような性的禁欲がどの程度実践されているかの確実な情報は、受胎確率と性交頻度の数理モデル的考察 [小林 1981: 260] をするうえで必須であるが、ジャワ島における資料は、筆者の知る限り、今日までない。V. J. Hull [1980: 226] 自身そのような質問をすることをあきらめざるをえなかったと言っているが、筆者自身の経験でも質問をすることはできても、それに対する村人の応答は事実から程遠いものしか得られない。

スンダ人社会においても占い本 (paririmbon) には性的禁欲をしなければならないとされている日が幾種類も記されており、また、サラムンカルの村人からもそのような話を聞くことが出来る。Djuariah [1968: 74] は、スンダ人社会でよく言われる禁欲日の全てを実践したとすると、夫婦間の性的交わりが許される日は1カ月に10日ほどにしかならないと試算した上で、実際には有り得ないこ

ととしている。サラムンカルの村人の見解も、月経期間中、出産後40日までの禁欲など、haram (イスラムに基づく禁忌) とされているものを除けば、実際に行なっている者はほとんどいないであろうという点で一致する。

ジャワ人社会で実際にどの程度性的禁欲が行われているのかの確実な資料はないが、本文で述べたような婚姻当初における禁欲期間、別稿 [Igarashi 1987: 17-18] で述べたような出産後の禁欲期間など、ジャワ人社会に比較すれば、いずれも短い、あるいはほとんどないに等しいこと、さらに、村人が知識としては持っているが実際には行われていないだろうとするものが、例えば、「妻および夫の wēdal (生まれた日の曜日) の晩 (1週間に都合2晩) は、性的禁欲をしなければならない」というように、イスラム的伝統³⁴⁾ によるものではなく、形骸化したジャワの伝統に基づくものであるらしいことなどから類推することが許されれば、スンダ人社会における禁欲の実践度ははるかに低いといえそうである。このような、イスラム的伝統を除く禁忌の形骸化も初潮以降間もない時期における受胎の可能性を高める一要因と考えられる。

もとより、生物・医学的な性的成熟は初潮をもって完成するわけではなく、初潮は単にその過程のひとつにすぎない。初潮が始まる以後数年間の妊孕力の程度とそれに影響を及ぼす栄養状態を初めとする健康状態についても言及すべきであるが、現段階で筆者はそれらを検討するだけのデータを持たない。

34) ヒンドゥー社会などに較べると、イスラム社会においては、儀礼的禁欲(ただし、月経期間中、出産後40日までの禁欲などharamとされているものを除く)は一般的でないといわれる [Kirk 1966: 573]。

謝 辞

この報告で用いた資料は、主に、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による「インドネシア保健生態学調査」（1983年度）の一環として行われた調査（1983年10月～1984年2月）の際に収集されたものである。ただし、記述データの多くは、日産科学振興財団の研究補助金による「インドネシア人類生態学調査」の一環として行なった2度の調査（1979年度および1981年度）に負うところが少なくない。筆者が調査当時在籍していた東京大学人類生態学教室の鈴木継美教授、ならびに上記調査の代表者である群馬大学公衆衛生学教室の鈴木庄亮教授には、筆者に対し3回にわたる西ジャワ滞在の機会をお与えいただいた。カウンター・パートのバジャジャラン大学生態学研究所の H. Bakir Abisudjak 講師には文献検索をする上で有用な御助言をいただいた。青木繁伸講師（群大・公衆衛生）には、コンピューター・プログラムをお貸しいただくなど、統計手法について御援助いただいた。また、調査地でインタビューを行うに際してのスンダ語の wording については、Djuariah M. Utja 講師（バジャジャラン大学・人類学）および Imas S. Utja 講師（同・日本文学）の手を煩わせた。ここに記して謝辞を申し上げる。

引用文献

- Ajoe Sangkanningrat, Raden; Kosasih Soerakoesoemah, R.; Memed Sastrahadiprawira, R.; Saleh Soeriawinata, R.; and King Soelaeman Natawijogja, R. 1927. *Iets over Hygiëne in Verband met Adat, Geloof en Bijgeloof van het Soendaneesche Volk*. Publicatie No. 10 der Vereeniging tot Bevordering der Hygiëne in Nederlandsch-Indië. Bandoeng: A. C. Nix & Co.
- Allamah Sayyid Abdullah Haddad. 1984. *Renungan tentang Umur Manusia*. Translated by Muhammad Baqir. Bandung: Mizan.
- Boerenbeker, E. A. 1931. *De Vrouw in het Indonesisch Adatrecht*. Proefschrift. 's-Gravenhage: J. C. v. Langen.
- Bruno Kaka Wawo. 1980. *Korelasi Umur Menarche, Umur Nikah dan Umur Ibu Waktu Melahirkan Anak Pertama dengan Agama dan Jenis Pekerjaan Ibu*. Praskripsi Tingkat Sarjana Muda. Ledarero: STF/TK.
- Budi Suradji. 1980. *Pola Umur Perkawinan*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Chapon, D. 1976. *Divorce and Fertility: A Study in Rural Java*. Report Series, No. 10. Yogyakarta: Population Institute, Gadjah Mada University.
- Cho, Lee-Jay; Sam Suharto; McNicoll, G.; and Mamas, S. G. Made. 1976. *Perkiraan Angka Kelahiran dan Kematian di Indonesia Berdasarkan Sensus Penduduk 1971*. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- . 1980. *Population Growth of Indonesia: An Analysis of Fertility and Mortality Based on the 1971 Population Census*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Commissie voor het Adatrecht. 1931. *Adatrechtbundels, XXXIV: Java en Madoera*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Crawfurd, J. 1820. *History of the Indian Archipelago*, Vol. 1. (Reprinted in 1967 by Frank Cass & Co. Ltd., London).
- Cut Arian Hs. 1982. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat, Aceh: Suatu Studi Kasus di Desa Montasik, Aceh*. Seri Laporan, No. 31. Yogyakarta: Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- Darroch, R. K.; Meyer, P. A.; and Singarimbun, Masri. 1981. *Two Are Not Enough: The Value of Children to Javanese and Sundanese Parents*. Papers of the East-West Population Institute, No. 60-D. Honolulu: East-West Population Institute, East-West Center.
- Dessy Hasanah Siti Asiah. 1980. *Faktor-Faktor Yang Mendorong Terjadinya Kawin Muda pada Masyarakat Desa Cilingga, Kecamatan Darangdan, Kabupaten Purwakarta*. Skripsi Sarjana Muda. Bandung: Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Djuariah M. Utja. 1968. *Survey tentang Keluarga Berentjana pada Masyarakat Desa Sekitar Kabupaten Bandung*. Skripsi Sarjana. Bandung: Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- . 1981. *Pengaruh Kerabat terhadap Kawin Muda pada Masyarakat Sunda: Studi Kasus di Desa Rancakole, Kecamatan Ciparay, Kabupaten Bandung*. Bandung: Fakultas Sastra, Universitas Padjadjaran.
- Eringa, F. S. 1984. *Soendaas-Nederlands*

- Woordenboek. Dordrecht : Foris Publications Holland.
- Geertz, H. 1961. *The Javanese Family: A Study of Kinship and Socialization*. New York : Free Press of Glencoe.
- Gibb, H. A. R.; Kramers, J. H.; Lévi-Provençal, E.; and Schacht, J., eds. 1960. *The Encyclopaedia of Islam*. (New Edition). Leiden : E. J. Brill.
- Hammūdah 'Abd al 'Atī. 1977. *The Family Structure in Islam*. Indianapolis : Islamic Book Service.
- 原 忠彦. 1968. 「東パキスタン・チッタゴン地区モスレム村落の家族構造と microdemographic condition との関係」『アジア・アフリカ言語文化研究』1 : 31-46.
- Hasan Moestapa, H. 1913. *Bab Adat-Adat Oerang Priangan djeung Oerang Soenda Lian ti Eta*. Nagara Batawi : Kangdjäng Goepërnëmén.
- Hughes, T. P. 1885. *Dictionary of Islam*. (Reprinted in 1976 by Oriental Books Reprint Corporation, New Delhi).
- Hull, T. H. 1975. *Each Child Brings Its Own Fortune: An Inquiry into the Value of Children in a Javanese Village*. Ph. D. Dissertation. Canberra : Department of Demography, Australian National University.
- Hull, V. J. 1975. *Fertility, Socioeconomic Status, and the Position of Women in a Javanese Village*. Ph. D. Dissertation. Canberra : Department of Anthropology, Australian National University.
- . 1980. Intermediate Variables in the Explanation of Differential Fertility: Results of a Village Study in Rural Java. *Human Ecology* 8(3) : 213-243.
- 五十嵐忠孝. 1982. 「個人年齢の推定方法に関する若干の覚書き—西部ジャワ・スンダ人村落での調査から—」『東南アジア研究』20(2) : 260-284.
- . 1984. 「西ジャワ・ブリアガン高地における水稲耕作—若干の人類生態学的観察—」『農耕の技術』7 : 27-61.
- Igarashi, T. 1985a. Some Notes on the Subsistence in a Sundanese Village. In *Human Ecological Survey in Rural West Java in 1978 to 1982 : A Project Report*, edited by S. Suzuki *et al.*, pp. 9-77. Tokyo : Nissan Science Foundation.
- . 1985b. Some Biosocial Variables That May Account for Fertility Patterns in the Sundanese Society. In *Health Ecological Survey in Indonesia in 1983/84, Part 1*, edited by S. Suzuki *et al.*, pp. 67-97. Maebashi : Department of Public Health, Gunma University. (Mimeographed)
- . 1987. Biosocial Variables Affecting Sundanese Fertility, West Java. *Man and Culture in Oceania* 3 : 1-28.
- 五十嵐忠孝. 1987. 「農作業, 季節, 星—西ジャワ・ブリアガン高地における畑地耕作をめぐる季節性と農作業のタイミング—」『東南アジア研究』25(1) : 85-108.
- Indonesia, Departemen Kesehatan. 1978. *Bank Air Susu Ibu*. Fatwa MPKS No. 21 Tahun 1976. Jakarta : Departemen Kesehatan, Republik Indonesia.
- Indonesia, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1982. *Adat dan Upacara Perkawinan Daerah Jawa Barat*. Jakarta : Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Kebudayaan Daerah.
- Inkiriwang, Justus. 1983. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Minahasa : Suatu Studi Kasus di Empat Desa di Kecamatan Dimembe, Kabupaten Minahasa, Sulawesi Utara*. Seri Laporan, No. 35. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- Iskandar, N. 1970. *Some Demographic Studies on the Population in Indonesia*. Djakarta : Lembaga Demografi, Fakultas Ekonomi, Universitas Indonesia.
- Julfita Rahardjo ; Pauline H. Hendrati ; Ihromi, T. O.; Tan, Mely G.; Way, A.; and Papanek, H. 1980. *Wanita Kota Jakarta : Kehidupan Keluarga dan Keluarga Berencana*. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- Kasto. 1981. *Fertility Behaviour in Sriharjo*. Monograph Series, No. 4. Yogyakarta : Population Studies Center, Gadjah Mada University.
- . 1982a. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Jawa : Suatu Studi Kasus di Desa Harjobinangun, Yogyakarta*. Seri Laporan, No. 28. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- . 1982b. Faktor-Faktor Sosial Budaya Yang Mempengaruhi Usia Kawin : Suatu Studi Kasus di Desa Harjobinangun, Yogyakarta. Makalah Disajikan dalam Seminar/Lokakarya Masalah Perkawinan dan Kehamilan pada Wanita Muda Usia di Jawa Barat, di Bandung pada Tanggal 5-6

- Agustus 1982.
- Ketty Giana. 1979. *Pengendalian Jumlah Penduduk Secara Adat di Desa Sukasetia, Kecamatan Cihaurbeuti, Kabupaten Ciamis*. Skripsi Sarjana Muda. Bandung : Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Kirk, D. 1966. Factors Affecting Moslem Natality. In *Family Planning and Population Programs: A Review of World Developments*, edited by B. Berelson, pp. 561-579. Chicago : University of Chicago Press.
- 小林和正. 1981. 「ヒトの再生産」『生活』(人類学講座第13巻) 田辺義一(編), 255-281ページ所収. 東京 : 雄山閣出版.
- Koentjaraningrat. 1985. *Javanese Culture*. Singapore : Oxford University Press.
- Koesnoe, M. 1975. *Kedudukan Wanita menurut Adat Beberapa Masyarakat Pedesaan Madura: Dihubungkan dengan Persoalan Keluarga Berencana*. Surabaya : BKKBN.
- Mahfudz, Gusti. 1982. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Banjar: Suatu Studi Kasus di Kampung Dalam Pagar, Kalimantan Selatan*. Seri Laporan, No. 32. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- Mahmou'ddin Sudin, El-Ustad. 1982. Faktor-Faktor dan Implikasi dari Perkawinan dan Kehamilan pada Wanita Muda Usia di Indonesia Ditinjau dari Sudut Agama Islam. In *Pengaruh Perkawinan dan Kehamilan pada Wanita Muda Usia*, edited by Does Sampoerno *et al.*, pp. 43-54. Jakarta : Ikatan Ahli Kesehatan Masyarakat Indonesia.
- Maloney, C.; Aziz, K. M. A.; and Sarker, P. C. 1981. *Beliefs and Fertility in Bangladesh*. Dacca : International Centre for Diarrhoeal Disease Research.
- Maria Ulfah Subadio; and Ihromi, T. O., eds. 1983. *Peranan dan Kedudukan Wanita Indonesia: Bunga Rampai Tulisan-Tulisan*. Yogyakarta : Gadjah Mada University Press.
- Massuana Kasim; and Rachmatiah B. Idrus. 1983. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Suku Bugis: Suatu Studi Kasus di Desa Ulaweng Cinnong, Sulawesi Selatan*. Seri Laporan, No. 34. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- Maulana Muhammad 'Ali. 1977. *Islamologi (Dīnu'l Islām)*. Translated by R. Kaelan; and H. M. Bachrun. Jakarta : P. T. Ichtar Baru.
- Mayer, L. Th. 1897. *Een Blik in het Javaansche Volksleven*. II. Leiden : E. J. Brill.
- McDonald, P.; and Edeng Abdurahman. 1974. *Marriage and Divorce in West Java: An Example of the Effective Use of Marital Histories*. Jakarta : Lembaga Demografi, Fakultas Ekonomi, Universitas Indonesia.
- McNicoll, G.; and Singarimbun, Masri. 1983. *Fertility Decline in Indonesia: Analysis and Interpretation*. Committee on Population and Demography Report, No. 20. Washington, D. C. : National Academy Press.
- Meuleman, L. E. 1937. Menarche, Huwelijk en Zwangerschap bij Inheemsche Vrouwen. *Geneeskundig Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië* 77(40) : 2413-2427.
- Meyer, P. A. 1981. *The Value of Children in the Context of the Family in Java*. Ph. D. Dissertation. Canberra : Department of Demography, Australian National University.
- Molly Mulyahati Djubaedi. 1971. *Perbedaan Pendapat antara Generasi Tua dan Muda Khususnya dalam Bidang Sex*. Skripsi Sarjana. Bandung : Djurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Nani Soewondo-Soerasno. 1955. *Kedudukan Wanita Indonesia dalam Hukum dan Masyarakat*. Djakarta : Timun Mas N. V.
- Nederlandsch-Indië, Departement van Economische Zaken. 1936. *Volkstelling 1930, Deel VIII: Overzicht voor Nederlandsch-Indië*. Batavia : Departement van Economische Zaken.
- Parsudi Suparlan; and Hananto Sigit. 1980. *Culture and Fertility: The Case of Indonesia*. Research Notes and Discussions Paper, No. 18. Singapore : Institute of Southeast Asian Studies.
- Peacock, J. L. 1973. *Indonesia: An Anthropological Perspective*. Pacific Palisades (California) : Goodyear Publishing Company.
- Prawirasoganda, A. 1941. Het Huwelijk bij de Soendanezen. *Djâwâ* 21(4/5) : 267-291.
- Prawirasuganda, A. 1951. Adat Perkawinan di Tanah Pasundan. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 84(3) : 209-279.
- Rimbawan, I Nyoman Dayuh. 1982. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Hindu: Suatu Studi Kasus di Desa Darmasaba, Bali*. Seri Laporan, No. 30. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.

- Singarimbun, Masri; and Manning, C. 1974a. Marriage and Divorce in Mojolama. *Indonesia* 17 : 67-82.
- . 1974b. *Fertility and Family Planning in Mojolama*. Monograph Series, No. 1. Yogyakarta : Institute of Population Studies, Gadjah Mada University.
- . 1976. Breastfeeding, Amenorrhoea, and Abstinence in a Javanese Village : A Case Study of Mojolama. *Studies in Family Planning* 7(6) : 175-179.
- Siti Maria. 1980. *Perkawinan di Bawah Umur : Faktor-Faktor Yang Mendorong Terjadinya Perkawinan di Bawah Umur pada Masyarakat Desa Cileles, Kecamatan Cikeruh, Kabupaten Sumedang*. Skripsi Sarjana. Bandung : Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Soepomo, R. 1933. *Het Adatprivaatrecht van West-Java*. Batavia : Departement van Justitie.
- Susi Desiana. 1980. *Kebiasaan Kawin Muda dalam Hubungannya dengan Pelaksanaan Undang-Undang Perkawinan di Desa Majalengka Wetan, Kecamatan Majalengka, Kabupaten Majalengka*. Skripsi Sarjana Muda. Bandung : Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Syoib M. Mahmud. 1983. *Perkawinan dan Perceraian pada Masyarakat Ogan Ilir : Suatu Studi Kasus di Desa Pegagan Ilir, Sumatera Selatan*. Seri Laporan, No. 33. Yogyakarta : Pusat Penelitian dan Studi Kependudukan, Universitas Gadjah Mada.
- Tan, Mely G. 1973. The Social and Cultural Context of Family Planning in Indonesia. *Indonesia Magazine* 17 : 25-50.
- Tan, Mely G.; Djumadias A. Nain; Suharso; Julfita Rahardjo; Sutedjo; and Sunardjo. 1970. *Social and Cultural Aspects of Food Patterns and Food Habits in Five Rural Areas in Indonesia*. Djakarta : National Institute of Economic and Social Research (LEKNAS), LIPI.
- Tanner, J. M. 1962. *Growth at Adolescence*. 2nd Ed. Oxford : Blackwell Scientific Publications.
- Tanzil-Ur-Rahman. 1978. *A Code of Muslim Personal Law*. Vol. 1. Karachi : Hamdard Academy.
- Timmer, M. 1961. *Child Mortality and Population Pressure in the D. I. Jogjakarta, Java, Indonesia : A Social-Medical Study*. Proefschrift. Amsterdam : Vrije Universiteit.
- Uton Muchtar, R. H.; and Umbara, Ki, eds. 1977. *Modana*. Bandung : P. T. Mangle Panglipur.
- White, B. N. F. 1976. *Production and Reproduction in a Javanese Village*. Ph. D. Dissertation. New York : Department of Anthropology, Columbia University.
- Winati Wigna. 1970. *Masa Haid Pertama Anak Gadis pada Masyarakat Sunda di Desa Nagrak, Ketjamatan Tjiparaj, Kabupaten Bandung*. Skripsi Sardjana Muda. Bandung : Jurusan Antropologi, Universitas Padjadjaran.
- Wong, Aline K.; and Ng Shui Meng. 1985. *Ethnicity and Fertility in Southeast Asia : A Comparative Analysis*. Research Notes and Discussions Paper, No. 50. Singapore : Institute of Southeast Asian Studies.
- Yasmine S. Al Hadar. 1977. *Perkawinan dan Perceraian di Indonesia : Sebuah Studi antar Kebudayaan*. Survey Fertilitas Mortalitas Indonesia, Seri Monografi, No. 4. Jakarta : Lembaga Demografi, Fakultas Ekonomi, Universitas Indonesia.
- Youssef, N. H. 1978. The Status and Fertility Patterns of Muslim Women. In *Women in the Muslim World*, edited by L. Beck *et al.*, pp. 69-99. Cambridge : Harvard University Press.
- Zuidberg, L. 1975. *Marriage, Fertility and Family Planning in the Kecamatan Serpong : Some Intermediate and Socio-Economic Variables*. Serpong Paper, No. 16. Jakarta : Proyek Keluarga Berencana, Universitas Indonesia.
- Zuidberg, L. C. L.; and Anidal Hasyir. 1977. Family, Marriage and Fertility in Serpong. In *Family Planning in Rural West Java : The Serpong Project*, edited by L. C. L. Zuidberg, pp. 73-104. Jakarta : Penerbit Djambatan.